

603
1/0

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 11 12 13 14 15

始



503-110



講
話

恒
森
悠
久



序

「宇宙の事實は吾人に道德の必要を教ふ」とは哲學が我々に與へたる最大の警醒である。世人はいろ／＼の意味に於て、永く哲學を誤解して居る。曰く厭世學とか、乃至變人學であるなどといふ。哲學は然かく淺薄の學問ではない。眞に哲學を知れるものは、厭世どころか反對に勤勉努力になる筈である。「怠惰は人生最大の吊也」とは又哲學が教ゆるところではないか。

古來より、偉人達士と稱せらるゝ人は、皆それぞれに宇宙觀人生觀を持つて居る。宇宙觀人生觀なき世渡りは、恰も舵なき船の如く、漂浪流轉、さながら蜉蝣のそれである。人の人たる生活は、その人格にあるのである。其の行爲の如何に據るのである。慈悲、忍辱、徳操、勇邁、苟しくも、人格と稱するものの内容は皆それ等、宇宙觀人生觀より發せざるはないのである。

哲學とは實に、此の宇宙觀人生觀を獲得する唯一の學問である。然かも想像にあ

らずして、理論より事實より、宇宙人生を究明する的確の學問である。アリストテレス曰く、「我れ自らを知り最大のものを知ること能はず」と、誰れか哲學を措きて、我自らを知り得るや、又天地人生を知り得るや、まことに哲學は、宇宙を知り、人生を知り、我を知り、眞の世渡りを教ゆる所の、最大の學問なのである。

大正拾壹年六月

恒 森 悠 久

哲學書の讀方について

讀書法といつて、書籍はその種類に應じて、讀み方の態度が大切であります。殊に哲學の如き高等思索に屬するものは、就中この態度が必要であります。

哲學は、讀む事よりも、考へる方が大切であります。讀んで解るものではありません。讀んだ事を考へるから解るのであります。故に一日に五十頁も百頁も讀む事は出来ません。若し無理に、五十頁も百頁も讀んだならば、其れは頭が痛くなるばかりで、さつぱり何一つとして、判るものではないのです。

夏目漱石氏は、どんな書籍でも手當り次第の處を開けて、讀んださうであります。哲學は斯うした讀方でもいゝのです。氣の向いた時、少しづ、讀んで、讀んだ事を批評的に考へなくてははいけません。哲學は、小説や傳記と別種のものであることを、くれぐれもおことわり申して置きます。

著 者 よ り

常一般 哲學講話

……目次……

緒言……………一

自然現象

實在……………三

物質……………二

意志……………一〇

自然科學

無と有……………六

空……………三

時……………四

空
時

量	五
質	五七
原因	六五
結果	七二
運動	七五
力	八二
形式	九一
轉化論	九七
物質現象	一二
精神現象	二二
慾性	二五
怒性	三四

觀念	一四三
其一、	一四三
其二、	一五〇
純正哲學	一七六
認識論	一八六
其一、	一八六
其二、	二〇〇
美學	二二三
倫理問題	二三四
——直覺說——權力說——合理說——快樂說——公眾快樂說——自我實現說——	二三四
犧牲	二三五
統一力(結論)	二五〇

(目次終)

一般常識的哲學

恒 森 悠 久 著

緒 言

哲學の内容を述ぶるに先立つて一言申し上げねばならぬのは、哲學の體形といふことでもあります。哲學には四つの大きな綱があります。それは自然現象、(自然科学ともいふ)倫理問題、認識論、美學、であります。この四體形は皆共に哲學でありますから、宇宙人生を研究すると云ふ目的に於て悉く一致しておりますが、たゞ研究の出発点が幾分づゝ相違するのであります。丁度それは哲學といふ大海へそれ／＼形の異つた四艘の船が乗り出した様なものであります。ですから自然現象のみでも、又認識論のみを研究しても、倫理問題を主として、共に哲學の目的は達せ

らるゝのであります。然らば其の四體形の内で、何が一番正鵠のものかといふ問題が起りますが、是れが一番正確なものとして他を廢棄する事は絶対に出来ないであります。何故出来ないかといふと、觀察の立場が違ふからであります。自然現象の立場では、我々の眼に觸れる世の中一切のもの、即ち自然そのまゝを土臺として研究の歩を進め、さて自然は斯の様なものである、故に我々が眞理と信すべきものは此れ是れであるといふ風に結論するのを、認識論では自然に重きを置かず、自然を觀察する我々の心理——即ち我々の認識を根底として研究するのであります。斯ういふ心持で自然を觀察しては誤りである、斯ういふ心持が眞實である、我々の心理の立場から宇宙を研究する時は、宇宙の眞理は如斯きものであるといふ風に、各々立脚地が異なる爲めに右の如き四體形が現はれたのであります。然し右四體形とも、何れも正確なる學問、正確なる眞理でありますから、是を捨て、彼を探るといふ事は出来ないのであります。

本書には第一に自然現象、第二認識論、第三美學、第四倫理問題といふ順序で、

其各々を例話寓話を以て、極めて判り易く、努めて平易に述べたのであります。従つて各編に於て勢ひ重複に説明する個所も屢々あることゝ信じますが、前述の理由の下に、彼を取り是れを省くといふ事が不能のみならず、不合理といふ惡結果を來たす事を懼れて重複のまゝを忍んだのであります。讀者諸氏もよろしく此の點は御察しの上彼我相對して研究の歩を進められたいのであります。

自然現象

「實在」

拍子木

代へ玉で濟まされぬ譯

舊派の芝居を見に行きますと、幕明きを知らせる爲めに拍子木を鳴らします。あの拍子木といふものは、木を細長く四角に削つたものです、それを兩方の手に一つ

づ、持つて打つけるのです。打ツつけられた拍子木は「キヨン」といふ威勢のいふ音を立てます。

處でその拍子木の使ひ方ですが、それは著者より皆さんの方がよく知つて居られる事と思ひます。又著者は茲で拍子木の使ひ方を説明しようとするのでもないのです。では何の爲めに拍子木を持ち出したかといふと、哲學上の「實在」といふ事をお話ししようと思つたからなのです。

そこで拍子木といふものは何でこしらへたかと申しますと「木」で拵らへたものです。その「木」といふものは何かといふと、地面に生へる植物であつて、「草」や「竹」とは違ふものだといふ事になります。

さてそんならば拍子木は木で拵らへたから「拍子木」と「木」とは同じものであらうと云へるかと思ふと、さうは行かないのです。何故いけないかと云ふと、「木」はすぐそのまゝ拍子木にはならないからです、又拍子木も其の儘木にはならないのです。これをはつきりと説明すると木は拍子木になる資格を持つて居るけれども拍子

木は木になる資格を持つて居ないといふ事が出来ませう。

木の長さを計つて切つて、そして四角に削つて二本揃へればそれで一組の拍子木になる事は出来ますが、拍子木は地に植えて水を掛けてやつても、それが根を出したり、枝を伸ばしたり葉をつけたりするやうな事は決してありません。だから拍子木は木だといふ事は拍子木といふものゝ實在を説明した言葉ではなくつて、そのもの性質を云つた言葉だといふ事なのです。

そこで拍子木といふものが「木」で拵らへたものであるにも拘はらず、「木」と同じでないといふ事はお解りになつた事と思ひます、それと同じで、拍子木は又他のものとも違ふのです。つまり拍子木の代りにはかかものを使つて見ます。拍子木で「カチ、くくく」とやる處を鉦でも叩いて「ガンくくく」とやつて見たのでは千両芝居も滅茶目茶になつてしまひます。そこに實在の意義とも必要ともいふべきものが起つて來るのです。

茲に二つの辨當箱があります、そして此の二つの辨當箱を一つづゝ兩手に持つて

打つつける時には拍子木を打つたと同じ様な音が致します。さあ此の場合には此の辨當箱の事も拍子木と云へる譯なのですが、さうは云はれないのです。これは矢張り「拍子木の代りにもなる辨當箱」といふより仕方がないのです。その辨當箱も木で拵らへたもので四角くつて細長いのですし、其上拍子木の代りにもなるのですから性質に於ては同じものだとも云ひ得られるのですが、只同じでないのは、「目的」といふものです、拍子木は音をさせる爲めに造つたもので、辨當箱は辨當を入れる爲めに造つたものです、その辨當箱を拍子木に使ふ事は出来ても、それを拍子木であるとは云はれないのです、これは代へ玉で済まして居られるかも知れないのですが、矢張り代へ玉は、替玉であつて本當のものではないのです。つまり替玉では済まされない理由は此處にあるのです。

それならば此處に一組の拍子木があるとして、それと同じ木で同じ寸法に拵らへて来て前にあつたのと取換へた時には如何なるかといふ事になります。此の場合ではさつきの辨當箱の時とは大變に違ひます。辨當箱の時には目的に於て違つて居た

のですが、今度は目的も同じなのであります。これならば前からあつたのも拍子木であるし、あとから持つて来たのも拍子木であります、それを取替へても、立派に同じものであるといふ事になつてまゐります。而もその音に於ても少しも異つた音色がないのです。

それでも哲學上これを同じものであると断定する事は出来ないのです、つまり前のはとは異つたものであるといふ眞理を動かすことが出来ないからです。つまり一組の拍子木が二組となつて、又一組となるといふ事までなのです、そして後から出来た拍子木を前の拍子木と取換へたといふ事を證明する事になるのです。何故ならば空間に實在するものは只一つだからであります。たとへば一個のものである處へ他のものを實在させることはどうしても出来ない事なのです。そこへ他のものを持つて来るには、前からあつたものを他の場所へ移さなければならぬではありませんか。一本の拍子木を板の上へ置いたとします、然してもう一本の拍子木をそれと同じ板の上に置くにしても、前に置かれた一本の拍子木と並べるとか、重ねるとかする

事は出来ますけれども、前と同じ場所へ置くならば、前から置かれてあるものを退けてしまはなければならぬのです。そして前からあるものを退けてしまへば、そこは空間が出来ます、その空間へは後から持つて来た拍子木を置く事が出来ます。それでは前からあつた方の拍子木は無くなつたのであらうか、と云ふ事になります。處がそれは無くなつたのではありません、唯退けられて他の空間へ置かれたといふ事になるのです。つまりそのものゝ位置（置かれたる場所）が變更されたのです、そして板の上の空間に實在したものが、その場所の必要に逐はれて他の場所に於ける空間へ移つたといふ事になるのです。それから其の拍子木が、もうあとに新しいのが出来たから要らないといふ事になつて、釜の下へ入れられて燃されてしまつたとします。さうしたらそれでもその拍子木は無くなつてしまつたかといふ事になります。木といふものは元來燃燒すべき性質を持つて居りますから、焼かれてしまへば煙を出して炎となり、火となり、そして灰となつてしまひます。そして灰となつたものはもう既に木ではないのです。それは灰といふ性質になつてしまつて

居るのです、そして灰は拍子木になる資格を持つては居りません。ですから焼かれた拍子木は何處でも「焼かれる」といふ經歷を得て他の物質、即ち灰になつてしまつて居るのです。これでやつと拍子木の實在は亡びてしまひました、けれ共拍子木であつた處の物體は未だ煙と灰とに依つて此の空間に實在して居るのです。炎となつた處の素質だけは空間に放散しますが消えたとは云へませぬ、その熱は空間の幾部分かを温めたものなのです。煙は空間を立昇つて行きます、そして遂にはそれが遠くなつて見えなくなつてしまひます。それも見えなくなつたのであつて、決して消えてしまつたのではありませぬ、空間のどこかしらで自分の實在を保つて居るのです。もしくは稀薄になつた煙の一分身が雨に混つて地上へ落ちて來るのです、灰は地上に捨てられても土の實在を犯す事は出来ませぬ、土の上に乗るとか、土の中に混るとかするのです。たとへば灰が土と混つても土は土で、灰は灰です。土の一粒の實在する處に灰の一粒を置く事は出来はしないのです。その土の實在する場所は灰の實在を許さないのです。一粒の土の上か、下か、それでなければ側に實在

を占める事は出来るのです。

と云つてもそこにはなんにもなかつたかといふとさうは行きません。なんにもない様に見えても、そこには空氣があるのです。そして灰は空氣の實在を退けて、今迄空氣の實在した處の位置を占めたものです。

「實在」といふのは以上に述べたやうなものですから、前の拍子木を替玉で濟ます事が出来ないといふ理屈はこれですつかりお解りになつた事と思ひます。つまり實在するといふ事は科學が證明をして呉れます。しかしその科學で證明して呉れたものは物質上の實在だけであります。

實在とは字の如く、實際に在るものなのです、物理學は世の中の物體を證明して呉れますが、世の中に實際に在る精神上の實在は證明して呉れません、世の中は物體ばかりでなく魂も實在して居る事は今日誰も認めないものはないのであります。世の中は是等の物體と精神とに依つて成立して居るのであります。そしてこの精神方面は心理學といふ學問が研究して居ますが、哲學は是等の物理學心理學に基礎を

置いて、理論上より更に進んで此の物體と精神の奥にあるものを見極める學問なのであります。物體と雖も偶然に世の中に在る理屈はないのであります、又精神も謂れなく我々の頭腦に存在する道理は無いのであります。如何なる理由の下に宇宙及び人生が存在して居るか其の根本の源動力を知らふとするのが哲學の領分であります。従つて哲學は、物理學心理學に基礎を於て更に一步進む處の學問でありますから、學問中で一番難かしいもの、學問の上の學問とまで言はれるのであります。實在とは字の如く實際に世の中にあるもの。精神と物體の一切を總稱する哲學上の用語であります。

「物 質」

机と踏臺

違ふもので同じもの

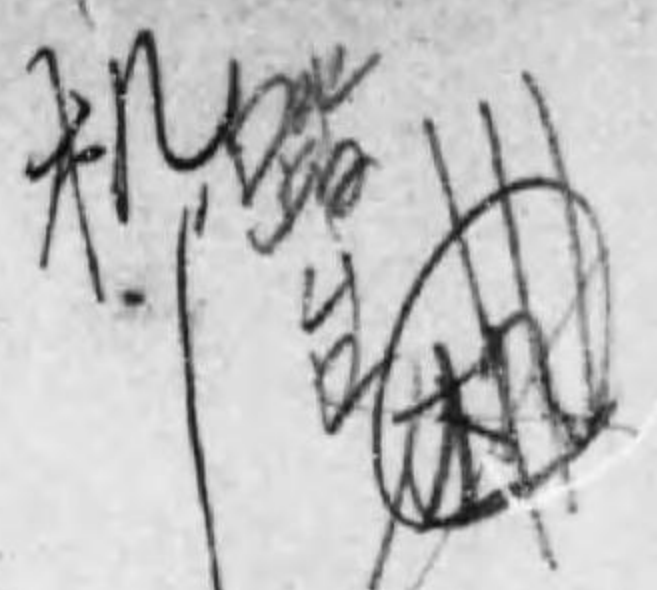
机も踏臺も木で拵らへたものです、けれ共机も踏臺も木だとは云へますが、机と

◎ 此は、未だに...

踏臺と同じものだといふ事は出来ないのです。机が踏臺でなくつて、踏臺が机でないといふ事は誰でも承知して居ります。机は読み書きをする道具で、踏臺は高い處へ届かせる爲めに人を乗せる臺になる道具だといふ事が解りさへすれば、机と踏臺は違ふものだといふ事はつきりと解るのです。

假りに高い處へ額を掛けようと思はす、さうしてその釘を打つ爲めに踏臺を持つて来て其上へ乗りましたけれ共未だ臺が低かつたものですから、そこへ机を持って來まして、其上へ踏臺を載せて、其上へ乗つて釘を打ちました。さうすると机と踏臺とは同じ役目を勤めたのです。此の場合では、その机と踏臺との二個の物體を眺め、二個の物體を總括して踏臺と申します。何故ならば、その同じ部屋の中でその場所と少し離れた場所へもう一枚の額を掛けようとする場合には、

「その踏臺を此處へ持つて来て呉れ」と云へば、必度其の部屋に居た助手かそれになければ奴婢は、その踏臺だけを持つて行きはしません、必ず机もいつしよに持つて行きます。何故かと言へばその高い處へ額を掛ける釘を打つには踏臺だけでは



届きませんから、茲では踏臺だけでは本當の役には立たないのです。それは踏臺の役を勤めさせるだけの高さが必要なのです、そして机が踏臺の足し前になつて始めて踏臺が踏臺としての役目を果たし得た譯になるのです。

此の時代の机を何故踏臺と云ふかと云ふ事はお解りになつた事と思ひます、これと反對に疊の上に座つて書物を讀まうとした時に、何かの理由のもとにその書物を臺の上に置かうと思ひます。そして机を持つて來ればいゝのですが机が無かつたので、其の代りに踏臺を持つて來ました。そして踏臺の上で書物を讀みました。さうするとその踏臺は机になります、机の代りになつたのです。

本當の事を云へばこれは踏臺が机になつたのではないのです、そして前の踏臺になつた机も踏臺だと云ふ事は出来ないのです。矢張り机は何處までも机であるやうに踏臺もどこまで行つても踏臺です。それが自分の持つて居る目的と性質の爲めに實在するものであるが踏臺と共通性の、高さといふものを持つて居る爲めに踏臺の代りを勤めたのです。

つまり机は踏臺の足し前にする爲めに拵らへられたものでないといふ事は解つて居るのです、そして踏臺も亦机の代りにされる爲めに拵らへられたものでないと云ふ事は決まつて居るのです。ですから踏臺はそんな處に、どう云ふ目的の爲めに使はれても矢張り踏臺といふ物質であるといふ事を否定する事は出来ないのです、それと同じで机も亦踏臺の足し前にされようが、物を置く臺にされようが机といふ物質に變りはないのです。

それがたとへば狭い家の中で、机も必要なら又踏臺も必要だといふ場合があります。そしてその目的の爲めに、此處に小さな丈夫な机を拵らへたとします。それは机の形はして居ますけれども、踏臺にも盛んに使はれます。これは如何したらいかと云ふ事になります、それは踏臺でもなければ机でもありませんのです。けれども使ふのには踏臺にも使へば又机にも使ひます。此の物質に向つて何んでもかでも名を付けるとしたら、これは唯「臺」とするより仕方がないのです。何故かと云へば、それは踏臺とか、机とか云ふやうに一方へ片寄つたものでなく兩方の性を持つ

からです。これは踏臺にもなる机であつて、又机にもなる踏臺なのです。つまり踏臺に使つて居る間は踏臺でありませす、そして机に使つて居る間は机なのです。唯使ひ道のない時には臺といふより致方が無いのであります。

茲に石で拵らへた踏臺と鐵で拵らへた踏臺があるとしてします。これは木で拵らへた踏臺と同じものであるかといふ事になります。

それは成程使ひ途に於ては同じであります目的も同じです。唯違ふのはそれに用ひられた材料の性質なのです。木や、石や、鐵はこれに使はれた材料であつて、それは用途に就ては少しの障りにもならないのです。つまり石で拵らへた踏臺に乗つて釘を打つのも、又鐵で拵らへた踏臺に乗つて釘を打つのも釘を打つ事と、その臺の上に人間が乗るといふ事は、決して木で拵らへた踏臺に乗つて釘を打つことゝ違つて居る筈はないのです。

併し木で拵らへたものと、石で拵らへたものと、又鐵で拵らへたものとが皆同じものだといふ事は出来ないのです。木には木といふ性質があるやうに、石には石の

性質があり、鐵には又鐵の性質があるのです。

前章實在に於ては、一組の拍子木と同じ拍子木を拵へても、其れは同じもので溜ふものであることを述べましたが、茲では踏臺と机と違ふものであるが、臺といふ性質に於ては、違ふもので同じものであるといふのであります、世の中に有と總ゆる物質は、皆同じもので違ふもの、違ふもので同じものなのであります。

河原へ行きますと、無数の砂利があります、こんなに澤山ある砂利の中には同じものが有りさうなものです、扱て中々同じ砂利は二つとありません、皆幾分づ、か違つて居るのであります、けれ共砂利といふ性質に於ては皆一つであります、つまり違ふもので同じもの、同じもので違ふものなのです。

人間と雖もやはり然うであります、同じ顔容姿の人は決して二人と有りはしません、同じ力の人もなければ、同じ智恵の人もありません、世界中の人間はみな違つて居ります、違つては居りますが、人間といふ性質に於てはみな一つであります、例へば一本の木に着く木の葉でも一寸見ても同じ様であります、嚴密に調べると

木の葉は皆一枚一枚違つて居るのであります、そして一枚一枚皆違つた位置に配されて居るのです、けれども葉といふ性質は同じであります、これは砂利や木の葉や人間ばかりでなく世の中に有と總ゆる物質は、皆悉く同じもので違ふもの、違ふもので同じものなのであります。

さてこれで物質といふものゝ事はお解りになつたこと、思ひます、斯うした物質といふものは一體何んであるかといふ事になります。そこで此の物質といふものを説明するに、物質と對ひ合せて可笑しくないものを持つて來なければなりません。物質と對ひ合せられるものは靈魂です。

希臘の哲學者プロテイノスの流出説を説いた處を一寸茲に御紹介しませう。

「萬有が自然的必然的に神より流出するのは譬へば太陽が、己のが光輝を失はないで、而も八荒を照らすやうなものである。さて又光輝が光源より遠くなるに従つて薄らいで行く如に、神の産出物も亦彼より遠くなるに従つて次第に完全の度を

減らして行つてしまひにはまづいらになつてしまふ」

プロテイナーノスは又こんな事も云つて居ります

「神の圓滿なる本質には決して變化又は増減ある事なし」

處でプロテイナーノスの云ふ「神」といふのは「天照皇大神宮」様でもなければ

「八幡」様でもありません、茲で云ふ「神」といふのは「信」のものとも云ふべき

もので、「心」と云ふものなのです。

そこでつまり神の本體といふものは何かといふと宇宙の靈魂といふ事になるので

す。そしてその靈魂といふものから遠ざかつてしまつたものが物質であるといふ譯

なのです。

もつと解りよく言へば物質と靈魂との差は比べるものではないといふ事になりま

す。早い話が靈魂を切つて来て四角に削つて拍子木を拵らへるといふ事は出来るも

のぢやありません。

茲へ子供を連れて来て頬を平手で力いづばい叩いてご覧なさい、必度その子供は

泣き出します。處が拍子木を叩いても音は發しますが泣いたり苦しがつたりするや
うな事はありません、茲が靈魂のある場所となない場所とが違つて来る處な
ので

プロテイナーノスはこれに就いて旨い事を云つて居ります

「靈魂には一つ／＼の小靈魂と、世界全體を通過して居る大靈魂とがあつて、その

兩方共、高い方と低い方との二つの階段を持つて居る。世界靈魂の低い方は物質

と結ばつて、物質を形造る力であつてこれは「自然」である。人間に於ては高い

方の靈魂形體以上不生不滅の者である。低い方の靈魂は身體と相結ばつてその活

動を生じる活力となつてある、世界の一番低い階段は物質である。物質は世界に

於てありと稱せられるべきすべてのもの、原因を爲して居るけれ共決して、「神」

と相對して獨立に存在するものではなくつて、全く消極的のものである」と。

「意志」

左官屋さん

捏ねてかへして

左官屋さんは四角な細長い箱の中で土を捏ねます、此の土はやがて壁に塗られる土なのです。左官屋さんに捏ねられて居る間は、土は壁ではないのです、壁にされる材料なのです。そして其の土は捏ねられて居るのが目的なのではないのです。土は壁になる爲めに捏ねられて居るのです。

人間も此の土のやうに、壁になりはしませんけれども完全なものになる爲めには哲學といふもので捏ねられなければならないのです。

茲では「意志」といふものに就てお話し度いと思ひます、「意志」とは心の志しであつて凡ゆる生き物が持つて居て、しかもそれが形を成して居ないものなのです。生き物と云へば先づ第一に人間としませう、それから動物と植物とです。そして

植物は意志といふものは持つて居るけれども、それは人間が研究して発見して、さうして證明したのです。何故植物に意志があるかといふと植物は他の生き物と同じやうに、食料を喰べて、成長して、それから生殖を營んで居るからなのです。つまり植物であつても他の生類と同じやうに殖えよう／＼として居るのです。此の殖えよう／＼とする事と、生きて居るといふ事とが「意志」なのであります。

それが動物になると、殖える事と、生きて居る事との外に、移動する事が出来ます、そしてその外に怒る事や、恐れる事や、喜ぶ事や、哀しむ事などを致します。處でそれが人間になると他の動物の持つて居ない處の理性の判断といふものを持つて居ります。尤も人間は理性の判断を持つて居た爲めに多くの他の動物を打負かす事が出来たのであります。

シヨーパーンハウエルといふ哲學者は「世界は意志なり」と云つて居ります。シヨーパーンハウエルの説ですと、意志といふものは自分の自由にならないものであるといふ事になります。つまり水が高い處から低い處へ流れる爲めに堅い岩を突き抜い

てまでも道を開けたり。鐵が自分のからだの重いものにも拘はらず滋石を慕ふようなものであります、そして生き物は生きて居る爲めには一生懸命に働き、しかも自分と同じ仲間を殖やす爲めには自分の身を殺しても努力する。といふやうな事になるのです。

成程水は高い處から低い處へ流れます、そして岩があればその岩を貫いてまで下の方へ流れて行きます。何もそんなに骨を折つてまでも下の方へ行かうとしないで、もいゝ筈なのです。水は大人しく岩の上へ來たらそこでちつとして居ればいゝのです。けれども水はどうしてもそこでちつとしては居られないのです。そして石の中味へ貫き透つて行きます。

鐵は滋石に引付けられます、そして滋石の力が鐵の重量よりも少しでも強ければ鐵は直ぐ滋石の方へ飛んで行きます。

生き物は一體に殺される事を厭がりません。自分の命が危ないとなると逃げられるだけ逃げようと思つて逃げ切れないといふ事が解ると、自分を殺さうとし

たものと戦ひます。生き物は死ぬのを厭がりますが、何故それを厭がるのだから知らないのです。生き物はどの道一度は死ぬものなのですから、別に死ぬ事をそんなに厭がらなくつてもいゝ筈なのですけれども。彼等はそんな事に無頓着でたゞ出来るだけ生きて居ようと努力して居るのであります。それ程死ぬのが厭ならば始めから産れて來なければよかつたんです。尤も自分から産れて來ようと思つて努力したのではないのです、つまり自然に産れて來てしま

れたのです。生き物は生きて居る爲めには大變に骨を折ります、そして命を大切にします、それ程大事な命であるに拘はらず、その命を蕃殖の爲めには捨てゝも惜しまないのであります。

生き物は自分が生きて居るといふ事が大切であるのですが、子を産んで自分と同じ仲間を殖やして行かうとする事は尙一層大切な事なのでせう。それが爲めにその大切な自分の命を捨てゝしまふ事は決して珍らしくはないのであります。

命も大切ですが、それよりも尙一層蕃殖の方が大切だといふのは如何いふものでせうか。自分は死んでも自分の仲間が殖えればいゝと云ふのは如何いふ譯なのでせうか。

これが生き物の中でも人間になると、自分の身を殺しても同じ仲間を殖やして行くのは結構な事とされて居ります。けれ共本當の事を云へば人間だつて成可く自分だけが生きて居たいのです。けれ共蕃殖の爲めには自分の身を亡してしまふのも忘れるのです、男が女を慕ふのも女が男を戀しがるのも、それは取りも直さず自分等の仲間を殖やさうとする意志の衝動であつて、是れを絶滅させる事は人力には及ばないのであります、そして一度子供を産みますと、其の子を育てる事、其の子を大切にすることは自己の生存よりも力強く、殆んど自分を忘れて努力するのであります。「女は弱いが母は強い」といふのは此の意志の事であり、此の事實は下等動物になる程一層顯著になつて、夏から秋に野山に啣くさまぐの虫、蜻蛉や蟻螂などは、まるで卵を産みに生れ一來た様なものであります、彼等の大部分は卵を産めば

直に死んでしまひます。

そして其の卵が一人前の動物になつて動きまわる時分には、その親達は疾つくの昔に腐つて土になるか、或は蟻に喰はれてしまつて居るのです。ですからそれ等の下等動物になりますと、子を殖やすと云ふ事が、その子が早く育つて親孝行をする譯でもなく、又蚊なら蚊の仲間の爲め、蜻蛉なら蜻蛉の仲間の爲めにどんな働きをしようとする譯でもなんでもないのであります。

それは水が堅い岩へ穴を明けて下の方へ進んで行くのと同じであります。又鐵が滋石に引付けられて、自分の身體の重いのも忘れてその方へ行かうとするのと少しも變りはないのです。

人間は子供を愛します。そして子供の爲めには自分といふものを殺しても構はないから子供をよく育てようと思つて居ります。けれ共親が思ふ通りに子供がよく育つか如何かといふ事は解らないのです。そして子供が親不孝をすれば、する程餘計に心配になるものです。殊にその子供が不具者にでもなれば、親は自分の出来る丈の事をし

てその子供を助けようとはします。その子供が無事に育つても一生洋親の厄介者だといふ事が解ると、親の愛は餘計に加はつて参ります。

つまり親はその子の爲めに盲目になります、子供可愛いわかりに自分の身を殺す事を何とも思はなくなります、それが爲めに又他の人に迷惑を掛ける事も氣が付かなくなつて了ひます、これは自分の心がめくらになつてしまつたので。これを盲目的本能と云ひます。この心持は、水が岩に穴を明けるのと少しも變らないのです。水が岩の上にとまつて、何もそんな大骨を折つて岩に穴を明けて下の方へ進まうとしなくつてもいい筈なのです。鐵が自分のからだの重いのに抱はらず滋石の方へ引付けられようとしなくつてもいい筈なのです。

この盲目的本能は一切の生ものが自然に持つて居るのです。つまり自分を一日でもいゝから餘計に生き延ばせたい。尙其よりも大事なのは我子を産みそれを育てたといふ事なのであります。

そんなら如何して子供がそんなに大切なのかと云ふと「何故だか解らない」で居

るのです、そして何故子供が自分のからだよりも大切であるか解らないのを誰も不思議だとは思はないのです。

斯うした自分で自由にならない自分の心を意志といふのであります。

明日の朝は六時に起きようと思つて寝ますが、明日になると眼覺し時計を掛けて置かなければ起きられないで七時まで寝てしまつたといふやうな事は決して珍らしくはないのです。普通ならば起きられない時間に起きようとするのは意志の働く處であります、茲では明日の朝六時に起きる必要があつたのですけれども。人間始めての生物は多く必要のない事に努力するのであります、つまり水の岩を透すやうに、又鐵が滋石を慕ふやうなものです。

早い話が必ず一度は死ななければならぬ人間が、死ぬのを何の理由もなしに厭がる事などです。斯うしたすべての盲目的努力を意志と云ふのであります。そしてこれは宇宙の生物がみんな持つて居るものなのであります。

シヨールペンハウエル曰く

「動物の個體が其種族の理想に完全に適つた者のないのは、其生存競争の爲めに一朝の勢力を消費してしまふからである、植物では意識らしいものがあるが、動物になると盲目的努力ばかりに任せては暗の夜を燈火なしに辿るやうなもので、競争場裡に立つて後れを取るの恐れがあるので、意志は自分の行手を照さうとする爲めに燈火を點ける、此の燈火といふのが智力である。智力は動物の上等の方のものである程だん／＼精巧になつて行つて、人間でおしまひになつて居る。智力は意志の奴隷であつて又脳髓の官能である」

自然科學

「無と有」

生きて居れば

人間は米喰ふ虫か

人間が生きて居るといふ事は人間には解ります。生きて居るから動く、生きて居

るから死ぬのを厭がります。そして生きて居るのを保證する爲めに物を喰ひます。我々が一番多く喰ふのは米でせう、此の米は我々に喰はれる爲めに世の中にあるやうな風になつて居ますが、決して米は人間に喰はれる爲めに有るものではありません。

米は稻の種です、稻は他の植物と同じやうに此の世界中を自分の仲間です。米は喰はれる爲めに地上に生じにしようとする盲目的努力を持つて居ります。稻は蕃殖をさへして居ればいゝのであります。

處が其處へ人間といふ強敵が現れて、その稻の種の皮を剥いで喰ふ事を発見したので、それが毎日我々の喰べて居る米なのです。米は喰はれる爲めに地上に生じたのではないのですが、喰ふ方を取つては誠に結構な品物になつて居るのです。

さてその米を喰べる方の人間の方はどうかと云ふと、なかに米を喰べて居なければ生きて居られないといふ譯はないのです。西洋人の様に牛や鳥の肉と、麥で拵らへたパンとを喰べて居ても別に命にさわるといふやうな事はないのです。けれ共我

く日本人には矢張り米の飯を喰べて居る方が身體の具合もいゝやうですし、又經濟上にも便利なのであります。

處で人間とは何であるか、人間とは米を食つて生きて居る動物かと申しますと、「あゝさうだよ」と云ふ人は恐らくありますまい。

人間といふものは飯ばかりを喰べて居ればそれで生きて居るといふ事は誰れにでも云へない筈です。人間は生きて居る命を繋ぐ爲めに物を喰つて居るのでして、そのものを喰べるといふ事が人間の生きて居る目的でないといふ事は解り切つて居る話です。

人間は唯生きて居るといふ外に、もつとよく生きようと努力して居ります。もつとよく生きるにはもつとよく働かなければなりません。もつとよく働くといふのは一人前の仕事を爲て居る人に二人前の仕事をしろといふのではありません。仕事の爲めの仕事を働くのではなくつて人間の爲めの仕事を働かなくてはならないのであります。

人間の爲めの仕事を働くのは、手や足だけを動かすのではありません。これは一つの智力の働きであるのです。そしてその智力を向上させるのが哲學を爲め物理、科學、文學、數學等のいろいろの學問なのであります。

科學は形の上に表れたものを證明し、又は表はすのですが、哲學はその範圍を超えて、形の上に見れないものまでも批判し説明するのです。従つて議論は議論を産んで、六ヶ敷い事は愈々難かしくなつて行くものです。

茲にお話しようとするのは自然科学に就て、自然科学と云つても無論哲學に於ける自然科学でありますからそのつもりで御覽を願ふのです。

自然界は「有」と「無」との二つしかないのです、そして有といふのは有るといふ事を云つたもので無といふのは無いといふ事を云つたものです、ですから無いといふ事は無い事を云ふのですから本當に無いのです。有るといふ事は實際にあるから有るのです、これは別り切つた話です。

自分といふものが世の中に生きて居るといふ事は疑ふ事の出来ない眞實です、茲

で自分は有ると云ふ事が出来ず。斯ういふ風に事實有るものは容易く認
が出来ますけれども、無いといふ事は、無いものゝ事ですから、それは認
が出来にくいのであります。

そして何もかも有ると云ふ論旨が肯定されて居た時代もありましたけれ
はその次に表れた「成る」といふ事が本當であるといふ論旨に負かされてし
やうな形があります。

「成る」といふ説では「生成問題」と名付けられて居ますが、つまり成つたから有
るのであるといふ論法を用ひて居ります。つまりこゝに大人が有るとします、それ
に向つてそれは大人が有るのでなくつて、「小供が大人に成つた」のであるといふの
です。そしてショーペンハウエルが「世界は意志である」と云つたのと同じやうに
世界のすべてを成るで律したのであります。

つまり子供は大人に成る、卵は鳥に成る、種子は木に成る、水は水蒸氣に成る、
空氣は風に成るといふ論法を用ひて居ります。

けれ共實際に於ては「有る」といふのも「成る」といふのも事實ですから打ちけ
すことは出来ないのです。そして「有る」といふ事は「成る」といふ事とは別々に
存在するものなのです。何故かと云へば「有る」といふのが本當の實在であつて、
「成る」といふ方は順序を云つたものなのです。「卵が鳥に成る」とは卵そのものを
認識したのではなくつて、「卵」といふものゝ持つて居る性質を説明した言葉なので
あります。

もつと解りよくお話しすれば、「生みたての卵」を賣つて居る家へ行つて「卵が有
りますか」と訊いた時に、その家の者が「はい卵は鶏に成ります」と答へるやうな
もので「有る」といふ事は有るといふ事を認識せられなくつてはならないのです
が「成る」といふ方は全然認識を缺いて居る定議なのです。つまりそこに卵が無
つても「卵は鶏になるものです」と云ふ事が出来ず。

處が哲學の生成問題では、此の「成る」といふ言葉を「成つたもの」として扱
て居りますから論旨は立つて居ります。けれども成るといふ言葉で以て有るといふ

言葉を打消してしまふといふ事は出来ない筈なのです。

「成るもの」はつまり「有るもの」であり「成つたもの」はそこに「成つて有るもの」であるからです。随つて此の「成る」も「有る」も實在を證明して居る言葉だと云ひ得る筈なのです。ですからいづれにしても此の「實在」といふ事だけは否定する事が出来ない筈なのです。

處がそれさへも哲學では否定する事が出来るのです。「如何して實在を否定するか」と云ひますと、それは認識に據るのです。つまり認識を離れては實在はないのです。「實在」は認識されて始めて完全になるのです。たとへば海の真中に一つの島が實在して居ても、それを認識する者が無ければ、それは「無い」と同じ事なのです。

假りに我々の前へ一個の金貨を持つて来て、「これが金貨である」と證明して呉れてこそ、金貨の實在を認識する事が出来るのですが、「金貨といふものは金の丸い板であつて表面に金拾圓と書いてあつて裏面に旭日光線の圖があつて、それは壹圓の

物品十個と交換することが出来るものである」と云はれた丈では、その對手を信用する事が出来なければ、金貨の實在も認識する事が出来ないのです。そして金貨に限らず何物でも、自分に認識出来ないものは「實在する」と證明する事は出来ないのです。つまり「無い」といふ事と同じものになつてしまふのです。

で、我々は認識したるものを「有」と爲し認識しないものを「無」と爲すのであります。

實在に就て、ウイリアム・オツカム曰く

「實在論に従へば普遍は個物の裡に存在す是實に一の物が多くありといふに等し。何となれば、其論にして正しくば普遍は多くの個物の一々に存在せざるべからざればなり。實在論は是の如き不條理の歸結を來す也。普遍は決して實在には非して單に若干の個物を(間接に)代表する符徴に過ぎず。眞に實在するは個物のみ。我等は先づ個物に接して其の符徴たる表象を思ひ浮べ更に其等の個々表象の符徴として概念(普遍的表象)を思ひ浮ぶ。されば我等は事物其自身を認識する能は

ざるなり。唯個々表象（感觀的直觀）のみは個物を直接に代表すといふ意味に於て實在的也。」

「空」

品行方正

無い意見の總仕舞

道樂者で仕方がない時、その親はよくその大切な子供に向つて勘當を宣告します。さて勘當された者は何うするかと云ふと、大抵は出入りの商人の家の二階へでも同居して、親の勘當の宥りるのを待つて居ります。そうして居る間は他人の厄介者になるのですから、思ふやうに金も遣へません。親の家に居た時は毎日のやうに親の金を掴み出して遊蕩した者でも他人の家に厄介になつて居てはそれも出来ません。仕方がないから辛棒しろ、辛棒してしまふ、といふ事になります。これは辛棒して

居るのでは無くつて諦めて居るのです。そして時機の來るのを待つて居るのです。

こんな時に不意に金でも入つて來れば、又むらくと病氣が出て遊びに行つてしまひます。こんな時代は品行方正とは云へません、これは品行方正時代とも云ふべきものでありまして唯仕方がないから品行方正になつて居ると云ふべきものです。

無い意見の總仕舞とは昔の人はうまい事を言つたものです。けれども茲にお話をする品行方正はその様な致方なしに諦めて居る品行方正では無いのです、眞實に世の中の空といふ事に氣付れると不知不識の間に品行方正になることです、自分の智識が此の哲學の空といふ問題にふれた時何人も一先づは自分が今まで歩んで來た道筋の迂且つ愚の事に思ひ到つて驕然と品行方正になるのです、けれどもこの空といふ問題は人間を品行方正にする爲めに造つたものでは無いのです。世の中の實際として太古何千年の昔より將來何萬年の先までも變りなく輝く處の宇宙の眞理なのであります以下空といふ問題に付いて説明致しませう。

茲に自分が有るといふ事は皆さんお判でせう然し死んだ先はどうなるといふ事は

誰も確實にお判になりまますまい。まして生れて来るまでの自分といふものゝ所在は更に判らないのです、けれども手品でも種が有ります。泥んや此の眞面目なる人間が生ずるのにまるつきり空つばから出来たとは思はれまますまい。いや空から出来る氣遣は無いのです。

人間の原は男子の精虫と女子の卵子が結合して、それが母體に十ヶ月間補育せられて出来たものだと言ふ生物學者はいひまます、して見ると人間といふ獨立した個體で無くて精虫と卵子とが人間の原だといふ事になります、人間の原は檢微鏡で見ても無くと動く虫の様なものだと言ふれば、そのうち動くものは誰れがこしらへたといふ問題になります問題が茲に到達すると生物學者はそんな事は判らぬと必ず申して逃げて終ひまます、誰がこしらへたか判らないものが人間の原であるのですから現在斯うして居る我々自身も何んであるか大なる疑問となつて來まます。古い哲學の説でこの事を懷疑説と唱へまして、不可解の問題に扱つたものでしたが、今日ではこんな問題は譯なく解決出来るのであります、それは何んでもない空といふ事なのです、

です、空といふ事が我々初め宇宙の實體なのであります。

「常住不變」とよく人がいひまますが常住不變といふものは此の世の中に一つもないのであります、常に變化して居るのであります、分秒の間も休みなしに推移しつゝあるもの斗りです。人間斗りで無く我々の眼に映する處の世の中の生物でも植物でも其の元の元を尋ねると決極現在の處へ戻つてしまひまます。過去の何者か原で現在の状態を表出し、現在が原となつて將來の何者かを現出させ、斯の如くぐるゝ循環して居る丈でこれが眞實の素であるといふものは無くなつてしまふのであります。

地球上に十五億の人口が居ります。十五億の人間が毎日排泄する處の糞と小便は實に大した量であります。もしこの糞と小便だけでも常住不變で有つたならば地球上は糞せめに逢はなければなりません。冬になると氷が出來まます。もし一度出來た永が再び水に還らずに常住不變で有つたならば他の生物は凍死するより外は無いで有ります、犬でも猫でも人間でも生れたら最後常住不變に生きて居るものとした

ら。決極は生物全體の滅亡になります。この様に一として又一刻として常住不變は無く循環して居るのが宇宙の實體なのです。だからこれが素といふものはないので有ります。

今この書物を書いて居る現在の私もこの書物を読んで居られる讀者諸君も斯うして居る刻々の間すも、一瞬の間すらも過古現在未來へと休みなく變化循環の活動を續けて居るのであります。この様に頭も無ければ尻尾もない原因もなければ結果もない、原因でないものもなければ結果で無いものもないのを眞實の無といふので有ります。「無」といふのは「空」といふより致方が無いので有ります。

初めも無く終りもないものはどんな曲尺を以ても計る事は出来ません、これはたゞ「空」といふものです。「空」なものが人間初め宇宙の森羅萬象の實體なのであります。「無い」は意見の總仕舞」とは偶然にも面白い言葉では有りませんが、そして此の無いといふ事を知る事が人間最上の幸福だとして有ります。後説に「空」に對する時といふ問題に付いて諸君の勉學に供しませう。

「時」

小野小町

花の色はうつりにけりな

「花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせし間に」といふ歌は小野の小町が詠んだものです。小野の小町といふ婦人は絶世の美人だつたさうです、美人と云つても唯十人並のいゝ女、それ以上の容貌だ位のものではないのです、小野小町は顔が綺麗であつたゞけでなく、智慧も十人以上にあつたので、つまり才色兼備の美人であつたのです。そんな風でそのころのありと總ゆる高官や、學者、大名、公卿などいふ豪い人達からいくつもの縁談を持ち込まれたものです。けれども共小野小町の眼で見れば、さうした豪い人達でも語るに足りる者はなかつたものなのです。

さうして小野小町は結婚をする時機を失つてしまつたのです。

「花の色は移りにけりな」といふのは、花が人にもてはやされて居たのがもうもてはやされなくなつてしまつたといふ事です。「我が身世にふるながめせしまに」といふ「ながめ」といふのは「見る」といふ事なのですが此の處では「長雨」といふ言葉で、長い間雨の降つて居る間に花の色は移つてしまつたといふ事なのであります。つまり小野小町が長い間自分に相當した配遇者を得ようとして居る間に、花の色は移つてしまつた、そして自分に氣の付いた時にはもう自分はお婆さんになつてしまつて居たといふ意味なのです。これはいくら才色兼備の美人でも「時」といふものには勝たれないと云ふ事實を表したものであります。

世の中にあるすべてのものは「時間」と「空間」に支配されて居るのであります。空間に支配されて居るといふ事は、空間が實在を移動させるといふのではありません、空間に實在するといふ事なのです。たとへば一粒の米でも。そのある處は空間なのであります。その一粒の米の有る處は空つばなのであります。處が何んにもない處へ米一粒が宙乗りをして居る筈はないのですから、その粒は糸でぶら提げ

てあるのでなければ、何かしらの上へ置いてあるのでせう。そして一枚の板の上へ置いてあるとします。さうするとその板の上へ米粒を持つて来るまでは、その板の上は空間であつたのです。それでもその板は土の上へ置いてあるのだから空間にはかり支配されて居るのではないと云はれるかも知れません。處でその土といふものは何かといふと、一粒づつの塊りが澤山に集つて居るのであります。そしてその大きな固りは地球といふ丸い土のお團子なのであります。

我々が夜戶外へ出て空を見ますと澤山の星が出て居ります。地球もあつた星と同じものなのです。そして地球の周囲は空氣に包まれて居るのです。地球の大きさは「面積約三千三百萬方里」と云はれて居ります。その大きな土の塊はつまり空間に置かれた一個の星なのであります。

地球からして空間の支配を受けて居るのですから、一粒の米でも、一枚の板でもそれから又我々一人前の人間でも、世の中にありとあらゆるものが空間の支配を受けて居るといふ事は眞理なのであります。

試みに鍬で以て土を掘つて見ます、すると土は一の塊になつて、他の土と離れます。そして今迄土のあつた處は空間となります。そこには他の物體が實在を占めるまでは空間で居ります。他の物體が實在を占めるまで空間であるのではありませぬ、そこは始めから空間なのであります、その空間へ土といふものが今迄實在して居たのです、ですからそこに今迄實在して居たものを退けてしまへば、そこは以前の空間にかへるのは當然なのであります。

ですから一と鍬に掘り取つた土も水分が取り切れるまで乾かして置いてから、それを一粒づつに砕いてしまへば、一の土は空間へ散つてしまひます。此の一粒の土が空間に實在するのと同じやうに、此の一個の地球は空間に實在して居るのです。空間に實在する以上空間の支配を受けて居るといふ事は當然に云へる事なのであります。

時間に支配されるといふ事は、子供が大人になつたり、樹木が成長したりする事ではないのです。それはいくら時計を止めて置いてても時間は経つて行くものなので

す、子供が大人にならうとなるまいと、又樹木が成長しようとして、しまいとそんな事には構はないものなのです、何が如何あらうと時間はどしどしと経つて行きます。そしてその経つて行く時間といふものは限りないものなのです。

昔から今迄に何千年といふ時間が経つて來ました、或は何萬年と経つて來て居るか解らないのです、そしてこれから先き何千年、何萬年と経つて行くか解らないのであります。そして人間といふものは日増しに進化して來ました、そして尙一刻づゝに人間は智慧が進んで行きつゝあります。

今日では飛行器でも、潜航艇でもそんなに珍らしいものではありませんが、これが百年前だつたら大變なものであつたに相違ないのです。豊臣秀吉や、徳川家康がいくら偉くつても飛行器なんてものが世の中に出來ようとは夢にも思はなかつたのです。

人間といふ小さな生き物が共同團結して、國を擧げて戦争をします、そして人類のあらゆる苦しみと、恐怖と戦つて居る間にでも、時間はづんぐと進んで行きま

す、又人間が喜びに酔つて居るやうな時にでも時間はどしどしと経つて行きます。
 小野小町が理想に適つた夫を求めて居る間にでも、時間はそれに遠慮をしては居りません。時間が経てば新しいものは古くなつて行きます。古くなつたものはだんくんに亡びて行きます。

昔から今迄に人間界に於ても幾多の偉いものが現れました、そしてそれ等はみんな死んで行きました、今尚生きて居る偉い人や、又偉くなりつゝある人達でも必ず死んで行きます、生き物は死ぬ爲めに産れて來るのではありませぬが、時間が生き物を殺して行くのであります。

春が夏になり、夏が秋になり、秋が冬になるのは偉大な自然の力で、人間には何する事も出来ない真理なのであります。

春咲いた花が夏になると實を結ぶのは、時間に教へられるのではありません、時間はその等の事にはお構ひなしにどしどし経つて行くのです、そして花は實となる丈の順序を踏んで實となるのであります。これは時間が花を實にするのではなくつ

て、花は實となる資格を持つて居るからなのです。そして花が實になるのは時間のご厄介にはならないのですけれども、花が實になる間も時間は刻々と常に進んで居るのです。つまり花が實になるには時間といふものゝ支配を受けなければならぬのであります。子供は大人になる資格を持つて居ります。けれども子供が大人になるには、子供が大人になるだけの時間が必要なのです。つまり時間の支配を受けなければならぬのです。樹木は勝手に成長します、けれども、樹木だけが他の何物の支配も受けずに成長するといふ事は出来ないのです。これとても時間が成長させて呉れるのであります。

さて此の「時」といふものは斯うしてあらゆるものを支配して居ります。例へばこゝへ大きな一個の石を持つて参ります。石は生き物でありませぬから育つといふ事はありません。けれども此の石がいくら堅いものであつても時間と争ふ事は出来ないであります。たとへば昨日の石も、今日の石も同じであるとした處が、昨日と今日とは二十四時間の時が経つて居るのであります。つまり二十四時間古くなつ

たものとなります。ですから世の中のものあらゆるものは時間に支配されて居るといふ事が出来るのであります。

此の「時」といふものを細かに分けると、三つのものになります、それは「過去」と「現在」と「未来」とでありまして、「過去」とは、過ぎ去つた時の事で、つまり現在までの時で「未来」とは現在から後の時間なのであります。「現在」といふのは、今といふ事で「現在繼續」が過去と未来とに別れるのであります。

たとへば今が恰度十二時だとします、さうして、時計が十二時を打ちます、それが打ち終るともう今は十二時だといふ事は出来ないのです、その十二時は過去のものとなつて十二時一秒といふ時が来たのであります。さうして現在といふものは刻々に移つて行きますから、恰度「過去」と「未来」との一番接近した、その真中が「現在」といふものであります。我々がよくいふ、「只今お歸りになりました」

などといふ言葉の中の「只今」といふのは現在なのではないのです。此の「只今」

といふ言葉に名を付ければ「現在繼續」といふ可きものとなるのです。「今歸つた」此の今はさつきといふ言葉をつめたもので、その歸つたのは今ではないのです、さつきから今まで續けての間を云つた言葉なのであります。「今歸る」といふ事は今直ぐ歸るといふ事でこれは未来であります。「今歸る」といふ事は「未だ歸つては居ない」といふ事なのであります、だから「今歸つた」といふのを「さつきは歸らなかつた」といふ意味に取れば、おのづから「過去」と「未来」とがよく解つてまゐります。

「時」といふものは此の「未来」が「過去」になつて行く事なのであります。そして世の中に實在するものは何に限らず此の時間の支配を受けて居ないものはないのであります。

「量」

腹掛の井

遣ひ果たして二分残る

一升の水を五合榼に一度に入れる事は出来ません、何故出来ないかと云ふと、五合といふ「量」は一升といふ「量」の半分だからであります。ですから五合榼に一杯の量は、一升榼に入れて見れば恰度半分にしかならないのです。何もいくら一升のものだつて五合榼の中へ這入つてもよさうなものです。これは如何しても入れる事が出来ません。

これは五合と一升で、五合が一升の半分ですからはつきりと解りますけれども、一升の榼へ一升一勺の酒ならば這入りさうに見えます、けれどもその一勺だけは、如何しても溢れるのです、これは溢れるのが當り前です、一升の榼へ一升一勺もし入つたとしたら、その一升榼は、一升一勺入りの榼なのであります。

榼は「量」を計る道具ですが、量は榼に依つて計られるだけのものではありませ

ん。だから水の量といふものは解らないのです、榼へ一杯の水や、樽に一杯の水は、その容れ物に入る丈の量が入つたので、それは澤山にある水の或る部分から少しだけを切つて持つて來たのです。

ですからこれは「一升の水」であるといふ事よりも「水を一升だけ容れてある」と云つた方が正しいのであります。そして斯うした場合その一升はそこへ入れられた、水の量なのであります。

腹掛の井へ金を入れます、そして腹掛の井が一杯になつた時にはもうあとに金が餘つて居ても入りません、これを無理に押し込めば腹掛は破れてしまひます。さもなければ、一升榼へ一升一勺の酒を入れるやうに溢れてしまひます。

容れものが一杯になるのは、容れられるものゝ量が、その容れ物に入る丈の量と、同一になつたのであります。

水のやうな液體ですと、一個所のものを一箇所に入れた場合に、その二つのものが混せられた、一つの水といふものになります。たとへば青い水と赤い水とを一つ器に入れて見ると、直ぐにその水は紫の色になります、そしてどこから何處までが青い水であつて、何處からどこまでが赤い水であつたか、解らなくなつてしまひます。これを餘程上手に、一つの器へ兩方の端から少しづつ入れて見ますと、一方が赤く、一方が青くなります、そしてその青と赤とがいつしよになつた處だけが紫色になります、けれどもはつきりとそれを前の青い水赤い水と別けてしまふ事はどうしても出来ないのです。

何故二色の水を一緒にしたら、前のやうにそれを二た色に別けることが出来ないかと申しますと、それは二た色の水ではないのだからです。もと／＼水は一つのもですが、その一つの水を二たつの容れ物に別けたのですから、いつしよにすれば、二つの水が一つになつたのではなくつて、二つに別れて居た水が元の通り一つになつたものだからなのです。水に限らず液體はみんな斯うであります、これが

箇體になりますと少しばかり違つて參ります。

此處に一個の石があるとして、此の一個の石は、他の一個の石を持つて來てもいつしよになることはありません。それは平たい石を二枚重ねても、厚い一つの石になる事は出来ないのです、それは矢張り、重ねられた二個の石なのであります。これを若し、糊で貼り付けるとしましても、矢張り貼り付けられた二個の石であつて、一個の石の代りをする事は出来ませうが、一個の石であるといふ事を認識する事は出さないであります。

「量」といふものは「單一」と「數多」と「合計」とに分けられます。

「單一」とは文字の通りにたつた一つのものであります、たとへば液體とか、一個の物體とか云ふものです、石は單一でありますけれども、それが澤山の小さな砂の寄り集りなのですから單一とは云へないのです、それは矢張り小さな多數の砂の集合なのであつて、その合計といふものが石であるといふ事になるのです。

これが石だから解りにくいのですが、近頃流行つて居る人造石になるとよく解り

ます、人造石は、石とセメントと水とで造ります。そして出来上つたものは一個の人造石ではありますけれども、これは単一ではないのです、「数多」のセメントと「数多」の石との集りに依つて出来たのですからこれは矢張り「合計」といふものであります。そしてその人造石でこしらへた家には木で造つた机や椅子や、それから鐵で拵らへた金庫や、瀬戸物で拵らへた火鉢などが具へられて、そこに人間が棲んだり、そこで人間が働いたりします。それを家と云ひます。

家は多くの単一の集合に依つて組立てられるのであります。そこに包含されたものを皆集めた合計が家なのであります、そしてその単一は一個といふものゝ合計でなくつてはならないのです。

例へば木で拵らへた机も、鐵で拵らへられた金庫も、おのれ自身は「机」といふ単一であり、金庫といふ単一なのであります。

此の単一といふことの實在は否定する事は出来ません、此の単一といふことが否定出来なければ、數多といふ事も否定出来ないし、又それと同時にその単一の合計

といふ事も否定出来ないので、合計が否定出来なければ、その分離も否定出来ないので。

此の様に、世の中にあるものは、みんな「分離」したり「合計」したり「単一」になつたりするだけで、量に於ては殖へも減りもしないので。此の事を物質不滅といつて、哲學でも、物理學でも、間違のない眞理となつて居ります。

それまでは形の上に現れた「量」ですが、序に形に現れない量の事をお話しませう、形に現れる方はお話ししてもよいし、又解りいゝ事なのです、けれども形に現れない量といふものになると幾分解りにくい事になるかもしれません。

形に現れない量といふものは、つまり心の働きです、人間の脳髓の働きにあることなのです。たとへば自分が今一時間後の事を考へて居るとします、さうすれば一時間後の事を考へる丈けの量を、脳髓が持つて居るのです。

豊臣秀吉は百姓の子として生れ、そして足輕となり、吏となり、遂には戦ひに亂れ抜いて居た、日本國中を修めつくしてしまひました、そして更に朝鮮を攻めこし

て大明(今の支那)まで攻め取らうとしました。

けれども秀吉は、百姓で居る時からそれを計畫したのではありません。その時分には足輕になる爲めに脳髓をつかつて居たのです、そして足輕になつてから、更になる爲めには一層の腦の働きのしました。そして天下を修めてしまふと、更に支那、朝鮮までも自分のものにしてしようとする計畫を起したのです。

ですから秀吉でも「吏」になつた時にそれに満足してしまへば一生涯「吏」であつたのでせうが、彼はそれに満足することが出来なかつたのです、秀吉はもつと大きな量を持つて居たのです、そして一段づゝ進んで行くに従ひ、一段づゝ量が大きくなつて行つたのです。そして最後に朝鮮征伐中に病死してしまつたのです。秀吉の量は死に依つて終りを告げたのであります。人間の量は向上するものです、毎日一合づゝの酒を飲んで居ればしまひには三合も五合も飲めるやうな身體になります、これはその人の量が向上したのであります。

ですから形に現れない量は無限なのであります、又その量が單一でないから合計

がないのです、随つてその量なるものは形の上に現す事が出来ないものであります。

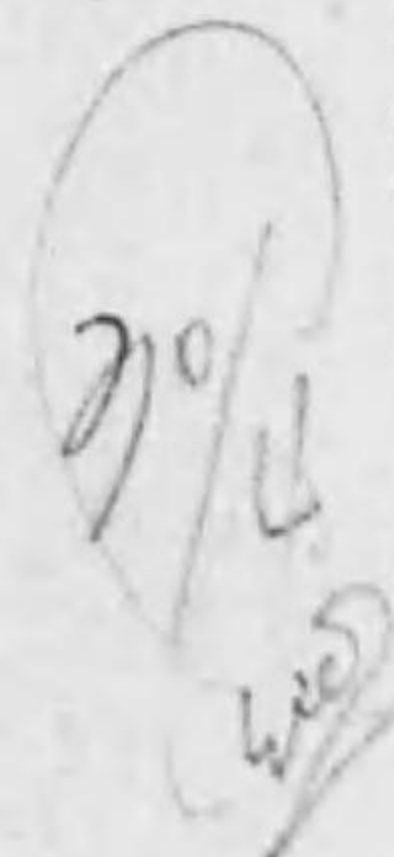
「質

餅屋は餅屋

眞似事だけでは氣が濟まぬ

「餅屋は餅屋」といふのは「道に依つて賢し」といふ事です、餅を搗いても、搗いた丈では餅にはならないのです、それを捏ねて取つて伸して乾かすとか、又は丸くしてお供ひにするとかしなければなりません。處がこの斗火餅や、お供ひを拵らへるのが、どうも餅屋でないと旨く出来ないのです。搗いた餅を板の上で平らにすることや、丸くしてお供にする事は、餅屋の行つて居る事を眞似をした丈けでは駄目なのです。

眞似といふ事は何處まで行つても眞似でありますから本當のものではありません



ん、本當のものでないから本當のものが出来る筈はないのです。本當の事と真似とは同じものといふ事は出事ません、だから真似事だけで済まして置くといふ事は出来ないのです。

真似だけで済まないといふ事は、前に申した「物質」代へ玉では済まぬ理由に就て申してあります、真似事もこれと同じ事なのです。つまり木で拵らへた机の代りに、鐵で拵らへた机を置きますとしても、それは兩方共机ではありませんが、木と鐵とは同じものではないといふ事は解つて居ります。

一寸他處へ客に行つたとします、そしてご飯を御馳走になります、「もう一杯お上んなさい」「え、もう澤山です」「まあさう遠慮をしないで」「ぢやあ一寸真似だけして……」と云つて茶碗を出します、真似だけしてもらふのなら茶碗を渡さないでもいゝのですが、それは愛嬌とします、處が真似だけする爲めに受取つた茶碗には必度ご飯を入れてしまひます、尤もこの「ぢやあ真似だけして下さい」といふのも、實は真似方をした丈位に軽くといふ意味なのです。本當の真似だけしたのなら

ば一粒も茶碗の中へ飯は這入らない筈なのです。斯うした場合に遣つて居る「真似」といふ言葉は本當の真似ではなくつて、最も少しばかりの量の事を云ふのです。

芝居へ行きますと、いろ／＼の役者が舞臺へ出て来て、その狂言にある人物の真似をします。そしてその舞臺の上へ、狂言にある中の人物を現はします、けれども此の舞臺の上へ現れた人物を以て、狂言に取入れられた人物と同じ人であるとは云へないのであります。

その場面に於ける人間生活を真似を以て認識させるに止まるのです。生き物はすべて死んで行きます。舞臺の上で役者が死んだ真似をする事は決して

珍らしくはありません、併しその死んだ真似といふ事は如何しても本當の死屍とは違ふのです。死體には心臓の鼓動もなく、脈膊もなく、呼吸もなく、靈魂も意志もありません、そして生きて居る時には易々と出来た事が一つも出来なくなるのです。それは生きて居た身體が死んでしまつた身體となるからなのです。それは死體と生體との違ひがあるからです。つまり「質」に於て違つたものとなつてしまつたので

あります、と云つても死體を分拆した結果と、生體を分拆して見た結果とが違ふといふのではないのです。つまり「からだ」といふ物體は同じなのですが、生きて居るといふ事と、死んで居るといふ事とが違ふのであります。

たとへば男でも、女でも、老人でも、子供でも、それ等はみんな人間であります。同じ人間ではありますが、それ等がみんな同じものではありません。それは何處が違ふかと云へばつまり「質」が違ふのであります。

女は男とは違ひ、子供は老人とは違ふのであります。けれどもこれ等は皆「人間」といふ生きものであつて、犬や、猫や、猿なども違ふのであります。

人間を一番大きく分けると「男」と「女」との二つに分ける事が出来ます、そして此男と女との兩方の性を持つて居るものがあればそれは完全な人間ではないのです。

女といふものは男ではないのです、ですから男でないといふ場合に、男でないものを呼ぶのに「女」と云ひます、それは種類を分けた言葉であります。男でないから女であるといふ事になるのです、これは、人間といふものを一個の物體として扱

つたからであります。

人間にしても男のする仕事と女のする仕事とが互に得點が相異して居るのであります。男は社交的に組織立つて居り、又労働にも適し、更に思考力も深遠であります。然し是を以て男が女より優つて居ると考へる事は出来ないであります。女が妊娠をしたり、又哺乳したり、育児をしたりする事は如何に智慧を振つても男は及ばないのであります。又毎日／＼家庭内の細かい用事に更に倦む氣色もなく平氣で立働

く事も、女には及ばないのであります。つまり男には男の質に適したる仕事があり女には女の質に適したる仕事があるのであります。「道に依つて賢し」といふ言葉を「質に従つて能あり」とすれば此の質と云ふ事はよく判るのであります。泥棒の番に馬を飼つたり。鐵砲打が猫を連れて歩いて無駄であります。と行つて戦争に犬に跨がつて出かける事も出来なければ、風呂桶で飯を炊く事も出来ないものであります。やはり戦争には馬に乗り、獵には犬を連れ、鼠の番に猫を用ひてこそ、「適所過材」即ち質に従つて能ありと言へるのであります。

動物や器物ばかりでは有りません、魚類でも昆虫でも植物でも礦物でも食料でも調味料でも皆その質に應じてそれづくに特長があるのであります。世の中に不用のものは只の一つもないのであります。なせないかと云へばみんな質が違つて居るからであります。みんなそれづくに能があるからであります。従つて世の中に是れが一番偉いものだと云ふものは無くなるのであります。世の中にありと總ゆる物はみんな一と廉の役に立つものばかりで、代用といふ事は出来ないものであります。男と女と比較してどつちが偉い宛といふ事を考へるのは愚であります。それは恰度砂糖と醤油とどつちが大事かといふ様なものであります。世の中の總ゆる物質の内の一個でも不用だからと言つて地球外に棄て、了へばそこには必ず不自由が生ずるのであります。處が、幸か不幸か我々の世の中は、いくら不用の物質でも地球に棄てる事は出来ないものでありますから先づ安心です。

同じ犬にしても、獵に行く時と、盜賊の番をする時と。噛合ひをする時とは、犬の質が違つて來るのであります。つまり獵大となつたり。番犬となつたり。喧嘩犬

となつたりするのであります。人間でもやはり是と同じで、親に對しては子となり、妻に對しては夫となり、子に對しては親となるのであります。そして此の違つた質を持つたる宇宙一切の物質は互に流通し、互に影響し、互に合同し、互に助け合つて居るのであります。(これは哲學の根本論に屬する事ですから茲には略しますが、詳しくは本書の觀念以下純正哲學を御参照願います。)

この様に質は其時の見方に依つていろいろ區別されるのであります。例へば女にしても、子供を産む質ともなれば、男を樂しませる玩具ともなり、又反對に男を遊ぶ道具ともなるのです。又母といふ質にもなれば、姑といふ立場にもなれるのであります。然し女のよりよき生活は、男と反對の氣質になる事であり、男の婦は女として無價値であり、又いくら男的を發揮しやうとしても男の其れには到底及ばないのであります。つまり「代へ玉で濟まされぬ譯」餅屋は餅屋に任かし置く方が價値があるのであります。昔しから女子の貞操といふ事を言ひますが、此れは女の質そのものが貞操に適して居るのであります。犬猫牛馬其他の動物を見ても牝

は皆一疋の牡の爲めに貞操を守り、他の牡には容易には服従しないのです、人間も是等動物と同じく、女には先天的に貞操を重んじる質が、備はつて居るのであります、つまり女は女らしく、男は男らしくする所に此の質といふ價値が有るのであります。そして銘々が自己獨特の質を發揮するのが、生物の一番よりよき生活なのであります、最近に獨身生活だとか、女も男と同じに平等の権利が有るものだとか、或は貞操を顧みぬ倫落の女などは、此の女の價値である質といふ事を忘却したる、邪道なのであります。

人間以外の生物は皆自分に備はつて居る質を正直に卒直に表現して、よりよき生活營んで居ります、處が人間になると、此の質といふものが動物の如く單純でない爲めに、兎角に、飛んだ見當違ひの、間違を演じ易いのであります、是は人間の弱點であると同時に一面に於ては又人間の強味なのであります。以上を哲學では質と名付けます。そして世の中一切の物は、此の質といふものの支配を受けてゐるのであります。

「原因」

種蒔き

どうせ斯うすりや斯うなるものと

原因とは、「もと」の「おこり」の事でありませう。畑に澤山の麥が穫れたとしてもそれが穫れるまでには必ず「原因」があつたのであります。それには「種蒔き」といふ原因があつたのです。種を蒔いたから實が穫れたのでその實の穫れる事は結果でありまして、その實の穫れるといふ事のはじまりはつまり種を蒔いたからなのであります。その種を蒔いたのは「實が獲れる」といふ結果の原因なのであります。人間と動物とは移動することが出来ます、全く我々は、今机の前に坐つて居るけれども、机の前を退いて火鉢の側へ行く事が出来ます、それは猫でも鼠でも、鳥でも虫でも同じであります。此の移動する事が行爲でありまして行爲は「行ひ」であります。たとへば一冊の本を讀んで居ります、そして眼はその本にある字を一つづ

見て進んで行きます、これは「視線」の移動であります。「いろは」と書いてあるのを見るには、先づ第一に「い」を見ます、其時は視線が「い」に在るのです。そして「ろ」を見た時には、視線が「い」から「ろ」へ移動したのであります。そして一枚の紙に書いてある字を一字づつ読んで行つて一ぱいになつてしまふと、手はその紙をめくつて次の紙にある字を読みにかゝります。

そして一枚づつめくつて行けばしまひにはその本を全部読み終つてしまひます、この移動する行為は、本を読み終る結果を生む處の原因なのであります。

場合に依つて大きな字で「いろは」と書いてあるのを見る時には、それを一と目で見る事が出来ず。けれどもそれは一と目に見ても、本當の一と目ではなく、「い」を見て、「ろ」を見て、それから「は」へ行つたのでありまして、たゞその間視線が早く動いたといふだけの事なのであります。それは一と目で見たので、一時に「いろは」を読み得たやうに思ひますけれども、本當は視線の動き方が早かつたのであります。

後 却

此の「自己移動」からはじまる他のものは皆「原因」と「結果」とになるのであります。たとへば「頭が痒い」時には、頭の神経に痒いものが觸るので、すると手がこの痒い處へ行つて搔きます。そして手が頭へ行くのは「搔く」といふ目的を果たす爲めに出かけるのであります。そして此の手の移動をさせた原因は何かと云ふと、その頭の痒かつた處なのであります。そして痒かつたといふのは觸覺神経に痒いものが觸つて居たのですから、痒くなつた原因は、その頭の觸覺神経へ觸れたものにあるのであります。

ですから動物の出来る動物の動作といふものは皆この「原因」があるのであります、又原因は結果を生む事のはじまりであるとも云へるのであります。

百姓が畑へ出て地面を耕して居ります。それは地面を鋤で掘つたり、鋤で返したりして居るのが目的ではないのです、百姓が畑の土を掘つたり返したりするのは、そこへ種を蒔いたり、苗を植えたりする爲めでありまして、種を蒔いたり、苗を植えたりするものは産物を收穫しようとする爲めです、種を蒔いたり、苗を植えたりす

る爲めには、種を蒔く事は無論ですけれども、土を耕さなければ思ふやうな收穫は得られないのです。

種を蒔くのも一つの移動であります、一とつまみの種をばらばらと手から零して一歩づつ前へ出て行きます、これは全身の移動なのであります、斯うして身體中を動かすのも移動ですが、前の頭の痒かつた時のやうに手一本を動かすのも移動なのであります。

斯うしたいろくの移動、行爲をするのには皆その行爲をする「原因」があつたからなのです。それは麥が欲しかつたり、本をしまひまで読んでしまひ度かつたり頭が痒かつたりして居たからなのです。

それでも頭を搔かうとして手を持つて行きかけた時に急に耳が搔くなつて、折角頭を搔く爲めに動かし始めた手で耳を搔いてしまつて、頭を搔くのを忘れてしまふ事があるのも珍らしくありません。

これは痒かつた頭が、痒い耳に變つてしまつたからなのです、手で搔く方は結果

を現はすものですから、痒かつた頭が、痒い耳に變つてしまへば、もう痒かつた頭は、痒くない頭になつて居るのです、そして痒くなかつた耳が、痒い耳になつて居るのです。ですから始めから、頭が痒かつたのでなくつて耳が痒かつたのと同じであります。だから、頭を搔きに行つた手が、耳へ行つて耳を搔いても、不思議ではないのです。つまり手を動かせる原因が、頭の痒い場所であつたのですが、その場所が耳に變つたから、今度は耳の方へ動いて行くのです。

本を讀んでもさうです、此の本を一冊讀まうとして取かゝります、最初の一二枚は面白いのでうか／＼と讀んでしまひます、そして半分位讀んで見るとだん／＼つまらなくなつて行つてしまひまで讀み切らない内に、その本を讀むのを止めてしまひます。人は斯うした場合「あの人は根がない」と云ひます、これは根がないのではなくつて「讀まう」といふ考へが「もう讀み度くない」といふ考へに變つてしまつたのです。

本を讀むといふ事は智識を殖やさうとする事なのです、本を一冊讀めば、それを

讀まないよりも餘計に智恵がつかえます。

一冊の本を讀んで一つ智慧が殖えれば、それはその殖えた智慧は一冊の本を讀んだといふ事が原因なのであります。それから讀みかけて止めてしまふのは、その本から受ける面白みが、面白くなつた事なのです。此の面白いといふ事は、爲めになることでもいゝのですし、又智慧を殖やすことでもいゝのです、それから唯珍らしいだけでも面白いのです。

それを讀みかけで止めてしまふのは、今まで自分の知らなかつた事が、書かれてあるので面白かつたのですが、あとは皆、自分の知つて居る事ばかりであると、面白くなくなつてしまひます。尤も自分の知つて居ることなどは讀んでも無駄骨なのであります。

それから「此の本は何度讀んでも面白い」といふ人があります、これは「何度」といふ言葉を考へなければならぬのです、本は何度見られても變りはないのですが、讀む方の注意が變つて居るからなのであります。

それが「二度目に讀んだ時には斯う云ふ處へ氣が付いた」とか「三度目に讀んだ時にはあれが解つた」など、云ふのは、その最初の讀み方が間違つて居たのであります。そして最初の自分の讀みが不完全であつたにも拘はらず、その本が讀む度に違つて居る解釋が出来るから面白いなどといふのは可愛なものではありませんか。これも矢張り移動なのであります。つまりその本を讀むだ人の智識が前に讀んだ時よりも餘程大きくなつて居たので、小智識から大智識へ移動したのであります。

これと同じで「魚」や「虫」は卵を産むでもそれを産みつけただけです、そして卵は時間さへたてば孵化するのです、さてその卵が産まれた時から孵化するまでは同じ形であり、けれども、産みたてと、もう直きに孵へるといふ時とはその卵の中に居る生きものが、經つただけの時間を移動して居るのです、もう直き孵化するといふ卵と、産まれたての卵とは、それだけの違ひがあるのです。

卵は孵へる目的の爲めに時間を費します、これは産れたてから孵へる處へまで、進んで來て居るのです、だから直ぐ孵へる卵は、産みたての卵から直ぐ孵へる處へ

まで移動して来て居るのであります。これは「質」に於ける移動であります。この移動は、原因から結果へ進み行く道の順序なのであります。

「結 果」

取り入れ

知つて斯うしてに斯なつた

「結果」といふものは前に述べた「原因」の終局なのであります、原因はものことの「起り」でありますが、「結果」はその「おこり」のおしまひなのであります、たとへば麥の種を蒔いて置けば芽が出て、莖が育つて穂を出します、そして花が咲いて、やがて實が生ります。その麥が芽を出したり、穂を出したりするのは、實を結ぶに至るまでの順序なのであります。そして種を蒔くといふ事は、實を結ぶ結果に至るまでの原因なのであります。

原因が移動を捉し、移動は原因の目的物——結果に向つて働くのです、そしてその目的の終つた處が、つまり結果といふものであります。

だから、種を蒔くといふ事は實を穫るといふ目的に達する原因なのであります。順序のまゝに云へば、種を蒔いた結果芽を出し、芽を出した結果莖が伸び、莖が伸びた結果穂が出て、穂が出た結果花が咲き、花が咲いた結果實が生るのであります。「斯うすりや」といふのが原因でありまして「斯うなる」といふのが原因から結果へ向つて行く順序なのであります、そして順序であると同時に結果なのであります。東京の市内を歩きますと、何處へ行つても電車が通つて居ります、電車は威勢よく走ります、けれどもあの電車は馬や犬のやうに勝手に走り度いから走るのではないのです。

あれは運轉手が威勢よく走らせる結果、電車が威勢よく走るといふ事なのです。又いくら運轉手が威勢よく走らせようとしても、その設備がしてなければ駄目なのであります。たとへば電氣の力が弱いとか、機械に故障があるとかしては駄目なの

であります。そして何處もかも満足に完全して居れば、その設備の通りの運轉が出来るのであります。

たとへば十哩の速力に運轉出来るやうに出来て居れば十哩は走れます、これが二十哩の速力が出るやうになつて居れば二十哩は歩れるのです。これは十哩走れるやうに、又は二十哩走れるやうな設備をした結果、十哩なり二十哩なりを走ることが出来るのであります。ですからどんな事件でも皆原因から結果まで行く事なのですが、其の結果といふ目的物が原因を湧起させ、原因は移動を起し移動は結果に進むのですからたゞぐる／＼と廻る丈であります。つまり原因も結果も移動も文字こそ違ひますが同一のものゝ運動の過程なのであります。

デカルト曰く、無といふものからはなんにも生れて来るものでない、すべてのものは其の生れて来る原因を持つて居なければならぬ、もし原因といふものが、結果よりも實在を含むで居ることが少いならば、結果に於ての餘分は「無」から生じたものだとしなければならぬ。これは出来ることではない。それだから原因

因は結果よりも多少か、それでなければ、原因と同じだけの實在を含むで居なくつてはならないのだ。たとへば美術家が製作をするのでも、その關係は原因のまざつて居る場合程、優つた製作品が出来上るのだから、その關係は原因と結果とが同等である實在性を持つて居るものだとしなければならぬ。』と。

「運動」

落花流水

會ひに來たわいな

「運動」といふものには四つの原因があるのです、アリストテレスといふ哲學者はそれに、一、質料因、二、形相因、三、動力因、四、目的因又は究極因。と名付けてきました。これはなかく解りいゝ説明ですから茲に述べませうと思ひます。

茲に一つの銅像があります、此の銅像といふものは何かといふと銅で或る物體の

質料因
形相因
動力因
目的因

像を拵らへたものです。銅といふものは礦物であります、そして銅は銅像を拵らへる材料なのです、だから銅像の質料は此の銅なのであります。此の銅像の場合ではその銅像にされる銅が質料因なのであります。

それからその銅を溶かして、鑄型へ流し込んで、如何いふ形に拵らへようかといふ事は鑄造家の考へにあるのです、これは鑄造家が「斯ういふ形にしらへよう」と考へます、その考へはすでに頭の中で一個の形をなして居るのです。これが形相因なのであります。

それから銅を銅像にするのには銅を溶かさなければいけないのです、銅を溶かすにはそれを窯の中へ入れて火を焚くのです、そして此の窯とか、それに用ふ火とか人の手敷とかいふものが動力因といふものなのであります。

それから最後の目的因又は究極因といふものは、その銅像が何の爲めに造られるかといふ事なのです。

たとへば東郷大將は日露戦争に偉大な成功を収めたからその功績を頌へるのであ

るとか、或は政治家が國家の爲めに一命を投げ出して努力したとか、さうした立派な人達を永く紀念する目的の爲めに、國家は銅像を建てます。又さうした立派な人でなくつても、たとへば富豪の飼ひ犬でも、その愛犬の死を弔はうとしてか、或は庭の風景を飾る爲めか、或る一人の人が勝手に鑄造家に頼んで銅像を拵らへるやうな場合であつても、それは矢張り目的因といふものなのであります。そして拵らへる必要があつたからこしらへたといふ事、拵らへたから出来上つたのだといふ事が「究極因」なのであります、だから目的因はつまり究極因なのであります。

運動といふものはいつでも此の四つの原因から起るものなのであります、早い話が「おかず」を買ひに行くといふ一つの運動が始まつたとします。これはご飯の、「おかず」になるものが質料因であります、「煮豆」とか「刺身」とかいふものがおかずとしての質料因であることは誰れにでも解る事なのです。それからその「煮豆」がお膳の上に乗つて、ご飯を盛つた茶椀と並べられた時が形相因であります。これもご飯なしで「煮豆」だけで置いてあつたのではおかずにはなりません。それはお

茶受けかそれではなければ、酒の肴といふものになつてしまふのです。そしておかすを買つて來るといふはたつきが動力因なのであります。つまり買ひに行かないでも豆屋が賣りに來たのを呼んで買つたにしても、それを呼んで買ふといふ働きが動力因なのであります。そしておかすになるといふ目的因は、つまりおかすになつたといふ究極因なのであります。

それでそのおかすになる「煮豆」といふものが、出來上つて盤臺の上に山盛りになつた時、煮豆としての究極因を占めて居るのであります。その豆が未だ釜の中にあつた時は、運動の動力因にあつたものなのであつて、豆が穀物であつた時が質料因であつて形相因なのであります。

これは人工に因る運動の原因に限ることなので、これが自然に出來るものと、質料因とそれからあとの三因はみな同じものなのであります。つまり形相因は目的因であり、究極因であり、そしてそれに達する順序を履んで行く運動が動力因なのであります。

茲に一本の櫻の若木があります、これは櫻といふ木の目的と形相と動力とを兼ねたものであります、そしてその若木は櫻といふものゝ質料を持つて居るのであります。此の櫻の若木は老木になる質料なのであります、けれ共老木になるのが究極の目的なのではないのです、これは生きものゝ持つて居る蕃殖の本能を果たす爲めなのであります。如何に櫻の若木が蕃殖をしようとしても、それが花を持ち實を結ぶ事が出來なければ駄目なのであります。ですから若木は出來る丈け早く伸びようといふ、出來る丈早く本能を果たし得るやうにならうといはします。

若木の究極は蕃殖を果たし得るまでにならうとする動力なので、それが成長といふ形相に現れてまゐります。そしてその若木の質料といふものは、その種と同じものなのであります。種は木になる質料なのでありますから、これは若木でも、老木でも質料といふ點に於ては同じものなのであります。

人間は櫻の花を見て多くはその散るのを賞玩いたします、櫻の方ではこれは甚だ迷惑な譯です、これは恰度立派な部屋を立派な書物で飾るやうなもので、書物の方

では飾りものにされて、少しも讀んで呉れないでは不服である筈なのです、書物を飾りものにするならば、その表紙だけでいゝ筈なのであります。

櫻の花は散る爲めに咲くのではないのですが、その散る處を賞玩されては少し見當違ひになるのです、花は實を結ぶ爲めに咲くものですから、それがもう實になる質料が供はつてしまへば、跡の花辨は不必要のものになるのですから、それは捨てしまつてよい譯なのであります。

それを人間は「落花情あり流水などか情なからんや」など云つて戀愛や人情の引出話に持出されるのは櫻にしては、思も寄らぬ迷惑なのであります。

ですから花の散ることは運動ではないのです、花は散るべき質料を持つて咲いたのですから、唯時間の支配に従つたといふ事に過ぎないのであります。

處で人工の方の運動は如何かといふと、前の銅像の事でも、銅が質料として第一に必要なことは勿論ですが、その銅が銅像になるのに必要な形相や、目的や、動力といふものが一々別々のものであるかといふと、これは一つ／＼に別々にしてしま

ふ事は出来ないのです、只運動といふもの、原因を説明する爲めに別けて置いた丈けの事なのであります。

だから斯ういふ風に考へて來ますと「運動」には二つの要素があるだけだといふことになります。そしてその一つは質料であつて、あとのものが形相といふもので、そして質料が形相になるまでの道が運動なのであります。

たとへば銅といふ礦物の質料が、東郷大將といふ形相になるまでの間の働きが運動なのであります。そして櫻の實といふ質料が、種となつて、若木となつて、しまひには花を咲かせ實を結ぶ處の一本立ちの櫻といふ形相になるまでの働きがつまり「運動」といふべきものなのであります。

だから「質料」といふものは未だ現れない状態である實體で、「形相」といふものはすつかり出来上つた實體なのです、だから種子は木になる質料を持つて居るものですけれどもそれは未だ木といふ形相にはなつて居ないのであります。

「アリストテレス曰く『物は質ではないから質は物でない。物は目撃することが

出来るけれども、質は目撃することが出来ない、質が目撃されるのはそれが物になつて現れるからなのである。此の形をたとへて見れば、一番下から一番上までの階段に並べる事が出来る、そして一番下は純粹の質料であつて、ものゝ材料となるべきものだからこれを「第一質料」と名付けることが出来る。そして一番上のものは純粹の形相だからこれは神と名付けることが出来る。神は純粹の形相だけれども、質料がないから神に運動はないのである。神は運動がないから慕ひ求められる、慕ひ求められるから世界を動かすことが出来るのである。』と。

「力」

火事だ

猫も杓子も持ち合せ

「力」とは形で見現せるものではないのです、早い話が「そら火事だ」といふと我

々は普段ならば持てもしない米俵などを、樂々と昇いで走ることが出来ます、けれども火が消えてから先づ／＼助かつたといふので、さつき自分で昇ぎ出したものを昇いで戻らうとすると、今度は如何しても昇ぐことが出来ませんのです。斯うした不思議のことを我々は始終見馴れて居ります、そしてそれを不思議なものとして極めてしまつて居ります。けれどもそれは少しも不思議な事ではないのです。

それ丈の力を持つて居るのですけれども、普段それ丈の力を出さずに居るから、普通ではそれ丈の力が出ないのです。それを出しつけければ何でもない事なので、いつでもそれだけの力が出るやうになるものであります。これは我々人間の持つて居る力といふものです。そして同じ力といふものにでもいろいろあります、米俵を昇ぐのにもさうですが、兩方の手で俵をつかみます、そのつかむ手も指が一本づゝ力を持つて居るのです、そして肩へ乗せまゝ、肩はその俵だけの目方を支へるだけの力を持つて居ます、そして足はそれだけの目方をつけた自分のからだを運ぶだけの力を持つて居るものなのであります。これ等は力を出さうとする意志の命令こ

依つて出て来る力なのでありますが、人間には此の外にも一つ我々の氣の付かないで居る力といふものがあります。

それは人間の身體の各部が、各々別々に持つて居る力なのであります。

たとへば一本の髪の毛でも、これを抜いて手に持つて見ると、それは恰度生きて居る細長い糸のやうなものになつて居ります、これは一本の髪の毛にでも線といふ形をして居るだけの力を備へて居るのであります。この髪の毛が毛といふものを組織する力を具へて居ないならば毛といふものが糸のやうに細長く育つべきものではないのです。毛は毛といふ物質に過ぎないのでありますが、これに毛といふものを組織する力がないならば、ばらばらになつてしまひます。ばらばらになるといふのは、毛を分拆すればいろいろの元素が得られますが、それを組織して毛といふ物質の形を具へて居るといふ事は力の働きのなのであります。ですから毛から力といふものを去つてしまへば、毛はばらばらになつて、さわれれば崩れてしまひます。

毛でさへそれです、だから爪とか齒とか云ふ骨や、其他の肉や、皮膚などはみな

その通りに、骨は骨として、肉は肉としての力を持つて自分自身を維持して居るのであります。

人間と云へばまるで神様の子供か、弟のやうに餘程豪いやうに聞こえますけれども、此の人間のからだといふものだけを持つて来て見たのでは全くつまらない物質なのであります。それは恰度ゴリラが着物を着て家の中に育つて来たものと少しも變つては居ないものなので、只先祖代々の習慣に依つて幾分かの構造が變化して居る位なものなのでせう。

何故人間のからだは物質であるかといふと、人間のからだは、骨と肉と血とで出来て居るからなのであります。骨といふものは人間ではありません、又肉といふもの丈けでも人間ではないのです、血でもさうです。それらのものが寄り集つてお互にお互を助け合ひ乍ら、それらのものを綜合して生活を營んで行かれるやうにしてあるので、始めて生き物であるといふ事が出来るのです。

生き物は生きて行く丈の力といふものを持つて居ります、たとへば人間が家を作

つたり、火を起こしたり、食料を撰擇したりするやうなもので、兎は木の芽を喰べ
 て生き、強い獸に襲はれた時には長い後足でもつて山の上へ飛上つて逃げて行きま
 す。斯ういふ風に生きものが生きて居るに必要なもの、中で一番大切なのは自分を
 生がす處の力なのであります。生きものには斯ういふ風にどれもこれも生きて居る
 に必要なだけの力を具へて居ります。そして唯生きて居るだけの他ば仲間を殖やす
 だけの力も具へて居るのであります。

處がこの力といふものは生き物だけに限つて持つて居るのではありません。其他
 のあらゆるものが持つて居るのです。

たとへばこゝに小さな土の固りがあります、その上へ大きな石を乗せれば、その
 土の固りは潰れてしまひます、これは小さな土の塊には上へ大きな石を乗せられ
 ても、潰れないといふ力がないからなのであります。

これが反對に小さな石の上へ大きな土の塊を乗せて見ますと、小さな石は潰れ
 ません、そして却つて上に乗せた大きな土の塊が崩れてしまひます。だから石は

土よりも堅い力を持つて居るのであります。土は石程堅い力を持つて居りませんが
 その代り、土は細かになる力を持つて居ります、そして僅かの風にも乗つてわきの
 場所へ移つて行く事も出来るものなのです。石にはさう云ふ風な器用な力がありま
 せん。

石の代りに卵を置いてその上へ土の塊を乗せて見ますと、卵は潰れてしまひま
 す。その殻は薄いこわれ易い皮なのであります。卵の殻は土の塊よりも毀れ易い
 程の力しか持つては居りません。けれども卵には親鶏に抱かれて二十一日間経てば
 孵化して皺になることが出来るといふ、力を持つて居るのであります。

それは恰度櫻の實が櫻の木になるやうに、又子供が大人になるやうなもので、こ
 れ等は運動を起す質料が持つて居る處の力なのであります。

力といふものは三種あります。その一つは此の質料が運動を起す力と、も一つは
 質料そのものがおのれ自身を支へて居る力なのであります。あとの一つは脳髓が
 考へる力なのであります。

人間が火事の時に米俵を昇ぎ出せる力といふものは、茲で云へば自分自身を支へる處の力なのであります。

これを何故自分自身を支へる力だと云ふのかと云ひますと、我々生き物には移動をするといふ能力があるので、つまり我々は動かさうとすれば動けるのであります。この動かうとすれば動けるといふのは何故かと云へば、前にも述べた通り移動する能力を持つて居るからなのであります。此の移動する能力は動物は大てい持つて居るものです、けれども死んでしまへば此の肉體は唯の物質となつてしまふのですから移動する能力を失つてしまひます。ですから動物の持つて居る力といふものは自分自身を動かす處のものであります。自分自身を動かすには、自分自身の持つて居る目方を動かす丈の力はなくつてはならない筈なのであります。自分自身の持つて居る目方を樂々と自由に動かすにはそれ以上の力がなければなりません。ですから十二貫目しかない人間が十六貫目の米俵を昇ぎ出しても、決して不思議だとするには及ばないのであります。

前の方にも述べてありますが、卵が鳥になつたり、種が木になつたりするのはその質料の持つて居る力でありますが、水といふ物質も亦いろ／＼の力を持つて居ります。前の方では「高い處から低い處へ行く爲めに水は堅い石にさへも穴を空ける」と申して置きました。その水は唯上から下へ行く事ばかりが本能の力なのであります。水にはすべてのものを犯す力があるのであります。

ためしに一個の石を水の中へ入れて置いて置いて置いたら、其の石には必ず水が浸み込んで非常に目方を重くいたします。これは唯々水が下へばかり行かうとする力だけしか持つて居ないのであるといふ證據なのであります。ですから浅い盆の上へ水を入れて、そこへ石を置いて置いたら、石は水の面より上へ半分位は出て居ても、その石の水の中に浸つて居る處は水が浸み込んでしまひます。これは水といふ物質がお互に密着しようとする力を持つて居る證據なのであります。

此の水には未だいろ／＼の面白い力が備はつて居ります。それは水が寒さ暑さに會ふ事に依つて、それを我々は認める事が出來ます。

水は寒さに會へば固つて氷となりまして、恰度硝子と同じやうな力を持ちます。それから熱に會ひますと蒸發して煙のやうになつて天へ昇ります、これは水蒸汽と云はれて居ります。さて空高く昇つた水蒸汽は重なり合つて雲となりませんが、それが冷たい空氣に當ると、もとの水に戻つて落ちて參ります、これが雨なのであります。これが尙冷えると雪や、霰になります。

水は斯うして天地間をめぐり廻つて居りますものですから希臘哲學の元祖とも云はれて居るターンスと云ふ哲學者は、此の水を以て世界の原質だと感達をしました。彼は、此の熱しては蒸汽となり、凍つては氷となり、雲となつたり雨となつたり、又は地の中に潜り込むかと思れば河となり、海となつては逆巻く浪を立て、居る處の此の水こそは世界の原質であるに相違ないと云ひました。何故さう思つたかといふと、此の水が一番いろ／＼のものに變化する處の力を持つて居るからなのであります。

ライブニツク曰く『余の哲學は實體は何ぞといふ問題より出發したのである、實

體とは物體の存在を云ふのではない、何となれば物體の存在が、物體の存在のみに止まるならばそれは否定せられ得べきものであるからである。實體は活動せざるべからず、そが活動に依つて實體は確然と證左せられ、而して肯定せられ得べきものである。故に實體は活動し得る存在者である。而して活動し得るものは力である。力こそは實體の本質なのである。』

「形式」

袴羽織

新年だけがお目出度でなし

「時」は刻々と移り行きます、そして春から夏、夏から秋、秋から冬、そしてお正月が參ります。

我々は此の記念すべき新年を目出度いものとして、元日には屠蘇を祝ひます。そ

して雑煮を祝ひ袴羽織を着けて年始に廻ります。

さうした祝ひ事は皆形式といふものであります、早い話が別に年始廻りをしなくつてもお正月は來るのです、お屠蘇や雑煮を祝はなくつてもお正月は過ぎて行きます。

これは當然の事です、つまり時間は刻々と進んで行くのです、それに晝とか夜とか、又は一時間とか一ヶ月とかいふ名前を付けたのは人間が勝手にやつた仕事なのです、だから我々の一年間の決算時である處の大晦日でも又お正月でも、同じ一日間は二十四時間なのであります。たとへば人間がどんな大騒ぎをして居ても、時間といふものは、そんなものには關係なしにどしどしと進んで行きます。

だから此の時間といふものと形式といふものとは別々なものであります。人間が新年といふ形式を以て元日を送るのは人間のこしらへた形式なのであります。

前には世の中にある何物でもが「質」といふものを持つて居るといふ事を述べて置きました。形式といふものもそれと同じやうなもので何ものでも持つて居るので

あります。

たとへば我々の住んで居る家でも、家といふ形式を具へて居るから家なのであります、これを板は板とし、柱は柱とし、瓦は瓦として別々にしてしまつては、家といふ形式でなくなつてしまふものなのです。これ等のものはみな材料といふものでありまして、これ等のものを一ヶ所に積み上げて置いてもそれを「家」であるといふことは出來ないのであります。其れはやがて家にもなる材料といふより致方がないのであります。

家を外から見ますと、屋根が三角になつて居りまして、その下が四角になつて居ります、これを遠くから見ますと、五角なものが置いてあるやうに見えます。そしてこれを景色として眺めますと、そこには丘があり、樹木があり、道があり、垣根があり、門があり、そして家があります、丘は丘の形式を取つてそこに存在し、樹木は樹木の形式を取つて居ります。家は人類を住まはせる處の、形式を取つてそこにあります。

人間は家の中にあつては主権者の形式を以て生活して居ります。彼等が自由に起居して居る間は鼠も猫も、蚤も、又火取虫のやうなものでも充分に自分を發揮して、自分がその家の主権者であるといふ形式を執ることは出来ないものであります。これは勿論人間自身が住む爲めに拵らへたものであるからなのであります。尤も同じ人間が拵らへたものにしても、犬小屋は犬を主権者として住まはせる處の形式を持ち鶏舎は鶏を住まはせる爲めに拵らへます。犬は犬小屋を以ておのが支配下に於ける住宅といたします、茲には猫や鼠のやうな他の動物が自由に暴れ廻ることを、その主権者が拒みます。

犬は庭の内を歩いて居る時はその庭の番をして居るものとなります、茲ではその犬は番犬の形式を持ちます、これが庭から一步外へ出ますとまぐれ犬の形式になります、併し飼主といつしよに歩く時はお供と云ふ形式を持ちます、そして愈々飼主を離れて獨立して生活を営む時は野犬になります、そして數多の人間の壓迫がありますと彼は狼の形式を取つて人間を噛みます、これは山犬となつてしまつたものです。

けれどもその犬が自分の小屋の中で寝て居る時はその小屋の主となるのです、併し犬はその小屋の主となつてもその小屋の持主は矢張りその犬の飼主なのであります、だから犬が犬小屋の主になつたといふ事は形式なのであります。

我々が家を借りて住むのもそれと同じであります、自分の住んで居る家は自分を主として不思議はないのですが、その家の持主は家主であります。斯う云ふ風な事を形式といふのであります。

同じ人間でも、金を澤山持てば金持といふ形式になり、金が失くなれば貧乏人といふ形式になります。大臣の位につけば其の人は大臣の形式を持ち、野に下ればやはり唯の人となるのであります、人間そのものの本體は金持でもなければ大臣でもない又貧乏人でもないものであります。従つて形式を誇るといふ事は人間の、本體を忘れた愚劣な考であります。又自分の位置が低くいと云つて、卑屈に陥る必要もないのであります、人間そのものは是等を超越して居るものです。此の論法は宇

宙の實質を直に指示することが出来ず、譬へば猫でも犬でも生れて来てから死ぬまでは猫は猫の形式であり犬は犬の形式である如きです。これは家が柱や板や壁や畳や瓦などを組立て、家といふ形式を備へたと同じで宇宙の或る者が、猫とか犬とかいふ形式を以て顯はれたのであります。此れと同じ理由で我々人間も、人間といふ形式を持つて現はれた或る者なのであります。櫻でも茨でも虫でも魚でもの悉くは皆一片の形式に過ぎぬ或る者の顯はれなのであります。故に一片の形式に過ぎない世の中の諸物象は悉く生きたり滅したり、育つたり枯れたりして一時と雖も留まる事なく流轉して居るものであります。然して家といふ形式を造るのに木を切倒し石を削り、又土を減らして瓦を焼くやうに、家といふ形式が造られるためには他に犠牲となるものがあるのですそれは物質に於ても同じであります、たとへば「銅像」と「銅貨」と何處が違ふかといふやうな場合に、それは質料だけは同じものではあるけれども、他のものは皆違ふのであるといふ事が出来ず、一方は銅像としてのすべてのものを備へて居るし、一方は銅貨としてのすべてのだけしか備へて居ないのです。

けれどもこの銅像は銅貨となることが出来ず、銅貨も又銅像となることが出来るのであります。けれども、銅像が銅貨となる時には銅像としてのすべての形式を捨てなければならぬのです、又銅貨の方でも銅貨としての形式を全部捨て、しまはなければ他のものになることは出来ないであります。

これと同じで、種が木となつた時は種としての形式を捨て、しまつたのであります。卵が鳥となつた時、卵は卵の形式を捨て、しまつたのであります。故に「形式」は總て一時的のものである。「永恒」は形式を以て其相を現じて居るが、我等は形式に拘泥する心なく又形式と離るべからざるものである。「のであります。是等は哲學の本論に屬しますから詳細は本書觀念以下に於て述べることにいたしませう。

「轉化論」

遊山

四季の野山のそゞろ歩き

埃臭い市内に住んで居るとのんびりとした郊外が戀しくなります。上野や日比谷の公園などへでも家内中へ出かけて行つて終日のんびりと散歩などを致します。

これは唯一家中が圓滿であるといふ事だけでも非常にいゝ事なのです、そしてこのたまの一日の散策がどれ程我々の心境を轉化させて呉れるかといふことに思ひ到ると、一刻としてもちつとしては居られない位であります。

著者はこゝに「轉化論」のお話をいたしますが、これを或人は「進化論」と云ひます、又或る人は「圓環論」など云ひます、そのいづれが正しいとも云へなければ正しくないとも云へないのですが、著者は唯理由なしに「轉化論」としてお話しをいたします。

世の中のすべてのものは進化しつゝあるのです。そして毎日地球の廻轉して居るやうに轉換して居るのであります。

あらゆる學術が刻々に進化して居るといふ事は恐ろしい程であります。さうした進化は刻々に古いものや、不完全なものをどしどしと破壊して行きます。そして新しいもの、完全なもの、もしくは完全に近いものが次ぎ次ぎにと現れて参ります。尤もこれは學術だけに限つた事ではありません。たとへば工業のやうなものでも又農業でも、商取引でもさうであります。そしてその目まぐるしい進化に依つて人間は更に幸福へと導かれて居るのであります。

著者は茲で此の「進化」といふものの因果關係に就て少しく考へて見度いと思ひます。

進化は何物にでもあります。それを一言にして云へば「進化」は唯物それみづからがよりよき存在を得る爲めの努力である」といふ事が出来るのです。たとへば種が木に進化するのも、卵が鳥に進化するのもそれでありませう。子供が大人になるのも大人が成功の域に向つて努力するのもそれでありませう。

さうしてそれ等のもの、進化はおのれ自身をもつとよく實在させようとする處に

あるのです。そして種が木となつた時、木は種の持つて居る處の目的を完成したものであるのです。種といふものから木といふよりよき存在へ向つて進化したのであります。けれども種が木に進化した爲めに、木となるべき目的で生じた種はその目的に於ては完成したのですが、種といふものゝ實在を葬つてしまつたのであります。これを時間と目的の上から見ますと進化ではありますが、茲に實在して居た種といふ物質を失つてしまつたといふ事はその木が實を結ばなければ取かへす事が出来ないのではありません、ですから著者はこれに向つては「進化論」と云はず「轉化論」と言ふのであります。つまり世界に實在する處の「種」は、それが成長した處の「木」といふ實在と同じ實在の權利を持つて居るといふ事なのであります。「種」は「木」となるべき質料と目的を持つては居ますけれども、その種が種といふ一個の物質であるといふ事は否定することが出来ないからなのであります。

これと同じで卵は鳥になります、卵が鳥に成るのは、種が木に成るのと同じであります。そして卵が鳥になるのは矢張り質料と目的とがあるからなのであります。そ

して卵が見事に鳥に成りをさせた時、矢張りそこに今迄あつた卵といふものは失くなつてしまつたのであります。

たとへば重い病人の營養として鶏卵を喰べさせようとし、けれどもその鶏卵の代りにヒヨッコを喰べさせて置いて濟むものではありません、ですから此の病人に取つてはヒヨッコよりも鶏卵の方が遙かに値打があるのです、さて恚うして見た時には「卵」といふものゝ實在を鶏といふものゝ實在よりも必ず値打のないものだといふ事は絶対に出来なくなつて來るのであります。斯うして物體の進化を見る時には、實際に進化して居るものは數ふる程になつてしまふのであります。本當の進化は退化であつてはならないのであるからであります。ですから種が木になつたり卵が鳥になつたりするのは、本當は進化ではなくつて變化なのであります。そして種は木と同じ質料であつて、卵が鳥と同じ質料なのであります。これは進化ではなくつて運動なのであります。そして轉化する事なのであります。それでは或る場所に直立して居た人間が一步だけ前へ出たとします。さうしてこ

れは進化であるか如何かといふ問題が出たとします。普通前へ出たことは進化であつて、後ろへ退いた時は退化であります。これは人間といふ動物の身體に前後といふ形式があるからなのであります、そして此の形式のある以上は前へ進むべく出来て居るものなのであるといふのは勿論の話なのであります。

けれ共此の一步前へ出たといふ事に對して議論なしにそれを進化と命名することは出来ないであります。何故かと云へば、或る一定の場所に立つて居るといふ事からして研究しなければならぬからなのであります。

解りよく云へば人間がそこに立つて居る理由が解らなければならぬのであります。それは必ず人間が生きて居る以上そこに立つて居るのはよりよく生きようとするからなのであります。

たとへばその人が飛行器の飛んで居るのを見て居るものならば、一步前を出ようと、一步後ろへ退がらうと差支へないのです。つまりよく見える所に立つて居ればいゝのであります。此の時には現在そこに立つて居るのは飛行器が見度いからなの

でありますから、その立つて居る場所より一步後ろへ退つた方がよく見えるならば、それは後ろへ退つても退化ではないのであります。それは立派な進化なのであります。もつとよく見える場所へ行けば更にいゝ進化なのであります。けれどもこれは實際に於ては自分の立つて居た場所を變へただけなのでありますから、進化といふよりも轉化といふ丈に過ぎないのです。

これが同じ人間の立つて居るのでも、陽氣の寒いのに着るものが薄いので、暫く日向に居るものであつたとしたらば、よく解ることです。つまりその場所が陰つてしまへばそこに立つて居た男は他の場所でもつとよく日の當る處へ行くのであります、その方角がどつちの方であらうと、又後ろ向になつて歩いて行かうとそれを退化と認めることは出来ないであります。

これは前に述べた飛行器を見て居る人と同じであります。そして飛行器を見て居た人が、その場所を替へてもつとよく飛行器を見ようとして居る間は何處へ歩いて行かうとそれは進化ではなくつて轉化なのであります。それが充分に飛行器を見て

充分に飛行器を認識してしまつて、未だそこに立つて居れば飛行器が見えるのにも拘はらず家の中に這入つてしまつたとすれば、始めて進化したといへるのであります。何故かと云へばその人間は飛行器を認識したといふ事だけ餘計に経験を積むだからなのであります。

日向ぼつこをして居た人間(著者はこれを假りに立ン棒とします)でもさうです。彼は寒さと闘ふ爲めに日向に居たのでありますから、彼が寒さと闘ふのを止めてしまふ事が出来たならばそれは一個の進化なのであります。彼にもう一枚の上着一杯の酒代を遣れば彼はその日向を立去る筈であります。それでなければ彼に仕事を與へることであります。彼は僅かの金銭を貰へば荷車のあとを喜んで押します。そして彼は寒さと闘ふのを止める事が出来るのでありませう。日向ぼつこをして居た人間は一步前へ出ようと、又他の日向へ場所を移さうと、それは轉化であつて進化ではないのであります。

彼は日向に居て與へられるものを待つて居たのです。そして與へられたものに依つて轉化しようとして居たものなのであります。

處が、運悪く彼に何物も與へられなかつたとして見ます、すると彼は向ふの日向、こつちの日向と歩きます、さうして太陽の力を借りて寒さと闘ひ乍ら一日を送つてしまひます。彼は日の暮れ方になれば寒さに慄え乍ら安宿へ戻つて行きます。彼はそこで宿錢と食料の借金をするのであります。

茲に於て彼は始めて退化したのであります。彼は今日一日仕事をしなかつた爲めに、今日一日に必要な金銭を得ることが出来なかつたのであります。そして明日は二分分の金銭を得なければならぬ事になつたのであります。しかも今日一日を無駄に送つてしまつたといふ事は彼の壽命が一日つまつたといふ事なのであります。

彼は今立ン棒をして居ても人間なのであります。人間であつて見れば生き物ですから、よりよく生きなければならぬ筈なのであります。それが今日はみな反對になつてしまつたのですから、茲で退化したといふ事が出来るのであります。人間の進化退化は何に依つて判断するのかといふ問題は茲に生じて參ります、こ

れは取りも直さず「よりよく生きる爲め」なのであります。そしてよりよく生きられるやうになつた事を進化と云ひ、それと反對の結果になつた事を退化といふのであります。

「人間は何から進化したのか」といふ問題は「人間は猿の一種のものから進化した」といふ議論が一番正確なものゝやうに知られて居ります。

そんなら何故猿が人間に進化したのかといふ問題が続いて起ります。それは取も直さず「よりよく生きんが爲め」なのであります。

そして人間は始めは木の枝へ小屋を掛けたり、穴の中に住んで居たりしたものであります。さうしてだん／＼に眷族が殖えて来るに従つて團體的相互扶助の生活を営むやうになつて来たものなのであります。

猿といふ動物は生來武器といふものを持つて居りません。牛は角を持つて居りますし、象はあの長い力の強い鼻と牙を持つて居ります、虎や豹は鋭い牙と爪を持つて居ります、鷹や、鷹は自由に空を飛び廻ることの出来る翼を持つて居ります。

けれども猿にはさうした武器を持つては居りません。僅かに木の皮を噛む歯と、木の實の皮を剥く位の爪とがあるばかりなのであります。けれども猿は他の猛獸たちの持つて居ない「智慧」といふものを持つて居るのであります。さうして彼等は他の猛獸など、戦ひ乍ら仲間を殖やして来たのです、従つて彼等の智慧は益々進化したて来ました、そして智慧が進化して来る一方に於ては肉體の持つて居る敏捷な動作や、爪や歯などは非常に退化して来たのであります。

尤もそれ等のものゝ退化する事よりもつと必要なものゝ方が進化したのですから、それを差引いても尙餘りある位なのであります。さうして今日尙我々人間は刻々に進化しつゝあるのであります。

人間は數限りない發明と發見とをして来ました、そして此の發明といふ事は今日以後いつまでも續くことでもあります。そして是等の數多くの發明と發見とに依つて愈々進化して行きます。我々の毎日に觸れるものや、手に觸れるものは何一つとして、人間の發見と發明とに依らないものはないのであります。

さうした數多くの發明と發見は我々人類をどれ程利益した事でせう、そして尙發
明と發見とは今迄のそれ等のものを幾度となく破壊して行く事でせう。さうして新
たなるものが幾度も現れて來ることでもあります。

遂には我々人間も神に進化する事が出来るかもしれない。そして我々人間が神
になつた跡へは又新たな猿が現はれて來て人間の世界を形造るのかも知れませ
ん。して見れば此の世界に於ける凡ゆるものゝ進化は矢張り轉換なのであります。
エマソンはこんなことを云つて居ります。

『世界は圓環である、或る時代の人間が一個の輪を作つたとする、さうしてその
輪に満足して居るといふ事なしに、すぐ次の人間がその輪をすつかりこわしてし
まつて新しくもつと大きな輪を造る、さうして又その次の人間が、前と同じやう
にもつと大きな輪を造つて、前からあつたものを打ちこわして行く』

全くさうであります、今著者は此の文章を萬年ペンで原稿紙へ書いて居りますが
此の萬年ペンの發明せられる前は、ペン先を一々インク壺の中へ突き通さなければ

ならなかつたのであります。未だ日本へペンの渡つて來ない頃には筆で書いたので
あります。今でも原稿を毛筆で書いて居る人がいくらもありますけれど、手早く綺
麗に書かうとするには如何しても今の處では此の萬年ペンが一番いゝやうに思はれ
ます。これ等は「毛筆を使ふ」といふ一つの輪を「ペン」を使ふといふ輪が破壊し
たので又それを「萬年ペンを使ふ」といふ輪が打破つて居るのであります。

又遠からずタイプライターといふ大きな輪の時代が來て萬年ペン時代といふ輪を
打ちこわしてしまふのかも知れないのであります。

斯ういふやうに次から次へと新しい智識の應用に依つてすべてのものが轉化して
行きます、その中で人間に益するものと害するものとを別けて進化と退化との二種
から成立つて居るのであると云ひ得るのであります。

元來生きものにはよりよく生きようとする本能があります。それが表へ現れて來
た時は轉化なのであります。何故人間に轉化の必要があるかと云ひますと、よりよ
く生きる爲めに生きて居る我々は何事もせずには居られないからなのであります。

實際此の世の中に何事もしないで生きて居るものがあるとするればそれは絶大の奇蹟であります。何故ならば、よりよく生きる爲めに生きて居る生き物が、自分の本能を忘れてしまへば、生き物としての實在の價値を捨て、しまつたのと、同じ事なのであるからです。

「私は今日一日何もしなかつた」と云ふ人があつてもそれは本當に何もしなかつたのではありません。その「何もしなかつた」といふ事は「表面に現れた事は何もしなかつた」といふ事なのです、ですから其人が一日晝寢をして居たのであるならば、それだけ休養をしたのであります、それなら何もせずに火鉢の前に坐つて居たのならば何か考へて居たのであります。それでも何も考へずに居たのならはその人は表へ出ようと考へて居たのです、そして表へ出るには小使がないと云ふ事に考へ付いたとしたならば、その人は何んにもしないのではなくつて苦しんで居たのでありますから、結局金策を考へて居たに相違ないのであります。或は何かを待つて居たのです。

だから人間は生きて居る間は一寸の時間でも何もせずには居られないのであります。何もして居ないでも必ずそれは何等かの形式に於てよりよく生きる爲めの努力をして居たものであります。

ヘーラクライス（小亞細亞のエフェリスの人紀元前五三五頃）に生れ西暦七五頃に歿せし哲學者）曰く、

『萬物は流轉して止住することなし』

スペンサー曰く、

『科學は部分的に、哲學は完全に、統一せられたる認識であつて、一切現象に通ずる眞理として予は進化の法則を確立した、予の體系の中心とも云ふべきは生物學である』

ダーウイン曰く、

『或るものが或るものに進化した時、それに取残されたものは即ち退化したものと成る。此の退化したるものは自然淘汰の運命に會ふ事を豫期しなければならぬ』

いふ

「物質現象」

見物

子に教はつて渉る淺川

著者は前項に於て人類の進化は「よりよき生活へ進む事である」といふ事を述べました。實際に我々人類は非常な進化をして來たのであります、そして生活が進化して來た一方に於ては肉體がそれだけ退化して來て居るのであります。我々はもとは闇の中で物を見ることが出來たのでありますが、燈火の發明に依つて視力が鈍つて來たのであります。

これは土龍と蚯蚓とを見るときよく解るのであります、土龍はいつも地の中を歩きまわつて居るのでありますから、さうした眞つ暗な中では大きな眼は不必要です。不必要

といふよりも却つて邪魔になるのであります。ですから土龍の目は極く小さなものであります。又蚯蚓は如何かといふと、眼といふものがないのであります、蚯蚓は濕氣のある土の中で、泥を喰つたり、虫ケラの死骸の腐つたのを喰つたりして生きて居るのでありますから、匂ひを嗅ぐ力があればもう目などはなくつても充分なのであります。

動物が眼を持つて居るのは第一に自分の身を護る爲めの道具であるといふ事は疑ふ餘地がないのです、眼はものゝ形や働きを見るものであります、動物が地上に生活する時にはその同じ地上に數限りない敵の居ることを發見します、蛙が蛇に呑まれる悲鳴、鷄が狐に襲はれる悲鳴、鳩が鷹に捕へられる羽叩き、それ等の敵の襲撃を防ぐには先づ智慧の働きであります、智慧の働きを充分に持つて居ないものは目を以てその敵の襲撃を一刻も早く發見して、逃げるとか、隠れるとかしなければならぬのであります。これに一番よく働くのは目と耳なのであります、耳は音を聞くだけですから、その場所で響が聞えない時、つまり襲撃者がじつとして

居る時などは、如何しても目がなくつてはそれを発見することが出来ないのです。斯うした目と耳の働きは一方に於ては自分自身を護るのではありますが、それと同時に又自分が襲撃者の位置にも立つのであります。

何故ならば動物は自分自身だけを護つて居るだけで満足して居られるものなのではないのだからであります。つまり自分が襲撃されない丈では生きて居ることは出来ないのであります。生き物は生きて居るといふ目的の爲めに營養を攝らなければならぬのです。

鳩が鷹の襲撃を逃れて、巢の中にかくれて居る丈では生きて居ることが出来ないのです、鳩は生きる爲めに餌を拾つて喰べなければならぬのであります。

蚯蚓に目がないのもこゝから来て居ります、蚯蚓は濕つた土の中に生きて居るのですから、他の鳥や獸の襲撃を受ける心配がないのであります、そして自分の喰物でも、自分の居る場所にある土を喰つて居ればいゝのですからそれを探す爲めならば尙更「目」などゝ云ふものは必要がなくなつて來るのであります。

斯う云ふ風に生きものはよりよく生きる爲めに進化しつゝあるものなのです。我々が散歩したり、遊山に出かけたりするのもそれと同じことであり、我々が生きて居る世界（人間世界）は他の動物の棲んで居る世界とは違つて、猛獸の襲撃を防ぐ爲めに多くの精力を失はないでもいゝやうになるまで進化して參りました、けれどもさう云ふものゝ襲撃よりもつと恐ろしい金銭といふものと、生存競争といふものゝ襲撃を受けるやうな事となつたのであります。我々人間は仲間の便利の爲め又安全に生活の出来るやうにとの考へからして貨幣といふものと法律といふものを發明したのであります。これ共我々人間の智識はよりよく生きる爲めに益々發達しつゝあるのですから、貨幣や法律の制度も幾度か進化して改良されて行くのでありませう。そして我々が金銭を得る爲めには働かなければならぬのであります、そしてその働いた爲めに勞れるのです、勞れを癒す爲めには休養をしなければならぬのであります。

ですから我々の散歩する事や、遊山することや、娛樂することは何一つとしてよ

りよく生きる爲めに必要なものばかりで不必要なものはない筈なのであります。

我々が一番恐ろしいと思ふ處のものは退屈を感じる場合の生じた時であります。我々が退屈を感じた場合は痛切に轉化を希望します、そしてその轉化に依つて退屈から免れようと思つた場合、此の場合の轉化は「進化」だらうが「退化」だらうがそんなことは考へないのであります。

第一我々は退屈を感じるべき筈のものではないのです、何となれば益々よく生きるが爲めに生きて居るのですから退屈などはない筈なのが當然であります。それに拘はらず退屈を感じたならば、それは取りも直さず人間生活といふものを捨て、しまつたからなのであります。

退屈を感じる事が何故に人間生活を捨てたものかといふことが出来るかと云ふと、それはよりよく生きる爲めに生きて居る生き物の本分を捨てたものであるからなのであります。實際我々に取つては唯の一分間でも無駄にしてもいゝといふ時間などがある譯ではないのです。なせならば我々はもつとよく生きなければならぬ、

からなのであります。

我々がもつとよく生きるといふことは、小商人が富豪となつたり、下級官吏が高等官となつたり、百姓が代議士となつたりすることなどではないのです。もし解りよく云ふならば亞米利加の大統領が亞米利加といふ一ヶ國の國民福の爲めに働いたとします、けれ共それは亞米利加人といふものに取つてはよりよき生き方をさせて呉れたことなのであります、それが必ず人類といふもの皆に向つてよりよき生き方をさせることにはならないのであります。たとへば亞米利加人が利益を得た爲めに支那人が損害を蒙るのであるならばそれは決して人類全體の爲めのよりよき生き方をさせる施設ではない筈なのであります。

だから人間を進化させるものは発見と發明との他には絶對にないのであります。小商人が富豪になるのも、下級官吏が高等官になるのも、種が木になるのも卵が鳥になるのもこれ等は皆進化ではなくつて成長とも云ふべきものなのであります。さうした一方に於ては「もう自分はなんにもしないでいゝ」といふ人があります

それはその人が成功したからであります、もしさうでなければ諦めたからなのであります。諦めたといふのは成功したのと同じ事です、つまりそこに安堵を見出だしたのであります。

大臣にならうと思つて居た人が次官までにしか成れなかつたとしたら其人は大臣になるといふ事を諦められない筈であります。けれどもその人が始めから次官にならうとして居たのならば次官になつても成功したのであります、そしてその人が次官になつた時に大臣にならうとする慾望を起したのであるならば其人の生活は一種の進化をしたのであります。

人間が或る一つの希望に成功した時はその希望に對して持つて居たものは失くなつてしまふのです、これは恰度木になつてしまつた種や、鳥になつてしまつた卵と同じなのであります。

これと正反對に成功を斷念した時には自ら諦めが湧いて來ます、つまり大臣にならうと思つて努力して居た者が、如何しても自分は次官よりも上になることが出

來ないといふ事を知つた時には、その大臣になるといふことを諦めてしまふのであります、それを諦めた時には次官で満足することが出来るのであります。そして此の満足することが出来るといふ事は唯諦めたといふ事なのであります。

處が人間にはよりよく生きようとする本能がある爲めにそこに満足するといふ事がなか／＼の困難なのであります。それが何故困難かと云へば「諦める」といふ事は生き物の持つて居る處の本能を曲げることだからなのであります。

我々がものを見物するのでも、それはよりよく生きようとする本能の働きに依るのであります。我々が家の前に立つて頭の上を飛んで行く飛行器を見て居てもそれは決して恥かしい事ではありません、又大通りの大商館の陳列棚を覗いて居てもそれは決して恥ではないのであります。我々のさうした唯見るといふ事だけでも認識を擴めるといふ一つの立派な仕事になつて居るものなのであります。我々が斯うして、今迄知らなかつたものを知らうとする事は、止むに止まれない人間生存上の必要條件なのであります。

我々が生きて居るのには世の中に存在するものを一つでも餘計に知つて居る方がいふ事なのであります。一つ餘計に知つて居るといふ事は一つだけ知識が餘計にあるといふ事なのであります。知識といふものは我々人間に取つては生存上の武器なのですから、その武器が一つでも餘計にあつたならばその人間はそれだけよく生きられるのであります。

だから人間は認識する爲めにいくらでも努力しなければならぬのであります。而して我々の認識の對照は何であるかと云へばそれは實に「物質現象」なのであります。

物質は現象に依つて認識せられるのであります、物質を認識するには絶えずその現象を見て居なければならぬのです、そしてその現象が時間に支配されて居て運動に依つて變化するといふ事を見究めてしまはなくつてはそれを認識したと云ひ切る事は出来ないのであります。

我々が野へ出て木立の中にある池を發見したとします、そして眞青に澄み切つた

水を覗めて居ても、その水が蒸気となつて汽車や汽船を動かすものだといふ事を思ひ起すことは出来ないであります。青い池は風を受ければ波を立てるでせう、又雨が降り續ければその水嵩を増すでせう、そして一方へ流れ落つる爲めにそこに瀧が出来るでせう、そこまでは誰れにでも聯想することが出来るのですけれ共、その水が汽車や汽船を運轉させるといふ事を聯想することが出来ないのは何故かといへば、それは物質現象に依るからであるといひ得るのであります。

物質は何一つとして現象なしに存在するものではないのであります。たとへば水の如きものでも、それが青い池となつたり、又落下しては瀧となつたり、流れては河となつたりして居ります。そして前にも述べてあるやうに冷えては氷となり、熱しては蒸気となります、そしてその質料こそは水でありますけれ共、その物質の現象は池であつたり、河であつたり、瀧であつたり、氷であつたり、蒸気であつたりして居るのであります。

フイローン（紀元前二十五年頃生れて紀元後五十年頃歿したる希臘の宗教哲學者

曰く「神の力のみによつて世界に存在する醜惡、不完全を説明することは出来ない。予は神の正反對なる第二の原理を物質の上に立てた、神はロゴスの媒介に依つて、(ロゴスとは神の第一子で第二の神であつて、一方に於ては萬物の原型たるもの、總體であつて、一方に於ては萬物を目的に従つて形成し、神の圓滿を世界に啓示する力の總體を云ふのであります)渾沌たる物質の塊から世界を形造つたものなのであるから、世界は決して終りといふものはない、物質は實に世界中に在る不善、不備、不完全といふものゝ原因なのである」

ライブニッツ(西曆一六四六頃より一七一六頃)の哲學者曰く

『物質界と云つてもその實體は單子であるから宇宙間には眞に死んで居るといふものはないのである、たとへば塵一本でもそれは活動として充滿して居るのであるだから物質の各部分は草木の茂つて居る庭か魚類を蓄へて居る池とも見ることが出来るのである。そして物質がその現象と異つて居るのは、つまり物質現象が物質を原因としたるものゝ結果なのであるからである。』

以上述べ來たつた「實在」「物質」「意志」「有と無」「空」「時」「量」「質」「原因」「結果」「運動」「力」「形式」「轉化論」「物質現象」を以て一通り自然現象及び自然科學は「はゝアそんなものか」位お判の事と信じます、以上十五の性質を備へた此の宇宙の實體は一體なんであるか。諸現象の末節に拘泥するでなく、靜かに諸現象が持つ共通性のもを抽象しますと、それは一個の意志であると言ふ事なのであります、シヨツペンハウエルは簡單に宇宙は意志也と論結されましたが實際それに相違はないのであります。

然し我々は、單に「宇宙は意志也」の六字に依つて眞に宇宙の實相に徹底したもののとは言へません。更に「意志」とは何んぞや、を知らねばならぬのであります。是を知つて初めて、宇宙は意志であつて其の意志は斯ふである」とほんとに宇宙の本質に悟入することが出来るのであります、以下より項を別ちて、意志の作用、即

ち心の作用の方面を例の如く例話寓話を以て説明し、哲學の主眼とする處の精細方面の本領に這入つて述べたいと思ひます。

精神現象

慾性

釣りは要らねえよ

慾とは、あらゆる生物がみな持つて居る自然の意志であります。人間でも、獸類でも、鳥類でも、蚊や蚤のやうな虫ケラでも、みな持つて居るのであります。そして此の慾といふものゝ性質は、何から生じたかと言へば、矢張り生存から來て居るので、生物といふ生物のすべてが、自分自身をよりよく生かす爲めに、自然に持つて居るところの本能なのです。

犬にでも、鶏にでも、二個の食料を與へて見れば、必ずその内の一方を先に喰ひます、餘程飢へて居ない限り、必ず營養素の多い方を先へ喰ふのであります。鶏でもさうです、しかも鶏は充分に食餌を與へられれば、胃が破れるまでも喰ふさうであります、これはよりよく生きる爲めの要求から來たのだと見ればいゝのです、そ

して蚤や蚊になりますと、人間の血を吸つて、自分の身體がその吸つた血の量の多過ぎた爲めに、動けなくなるまででも吸ひます、これもよりよく生きる爲めに、出來得る限り營養を攝らうとする、慾望から來るのであります。

人間以外の動物は、悉く生活が單調であります、彼等の生活は自分をよりよく生かすこと、自分等の仲間を殖やすことに限られて居るのです、牛でも馬でも、猫でも鼠でも、蜻蛉でも蛙でも、それはみな同じであります。

人間もやはり生物ですからそれと同じですが、それ等動物よりも多くの脳味噌を持つて居るために、その脳髓がさまざまな働きをして、一層よりよく生きる爲めに努力するので、此の意味に於て人間は「生」にも「蕃殖」にも成功したのであります。

その成功は、餘りによりよき蕃殖をした爲めに、仲間が著しく殖へてしまつて、却つて自縛自縛の形になつたのであります。丁度一升の榊へ、二升も三升もの酒を詰め込まうとするやうな形になつたのです。

榊へ入り切らない酒は、溢れて零れます、慾に追ひつめられた人間は、恰度猫に追ひつめられた鼠のやうなもので、その窮鼠かへつて猫を噛むやうに、人間もまた却つてその生活へ噛み付くのであります。それは恰度壘の中へ壓迫されたところの空氣が、その激しい壓迫の爲めに、却つて破裂して壘を破つて外へ出るやうなものであります。

マルサスといふ人は憊んなことを言つて居ます。

「人間には三つの慾がある、それは、生殖と生存と遊惰とである。故に若し慾のまゝに放置して置けば、人間は遊んで小供ばかり殖やして居る様になるから、遂には喰料が不足になる、人間は働いて喰料を造るからいゝやうなものゝ、若し銘々が働くことを避け合つたならば、そこには喰料と人口の不平均を來して、人類は悲惨な生物にならなければならぬ。人間は他の動物の如く、慾性のみでは生存出來ぬ、他の動物は喰料を造るといふ事をしない、たゞ地上の喰料を喰ひ潰す丈の慾性である故に人間に大切なのは働くといふことであつて、慾性は寧ろ棄てた方が幸福である」

實にうまい事を言つて居ります。人間の眞の幸福は、動物の幸福とは違ふのです。慾ばかりの生活は、彼等動物の生活であつて人間生活ではないのであります。人間は此の慾を棄て、初めて幸福になれるのです。此の慾を棄てるといふ事は、慾の出所である「生」を棄てることなのです。到底出来ない相談なのであります。

江戸つ子は金銭に淡泊で、中々氣前がいゝものです。彼等はしばしば茶屋酒を飲んだり、遊里に足を入れたりいたします。そして彼等は勘定を拂ふ時に、ボンと金を抛り出して「釣りは要らねえよ」と言ふのが癖です。たとへば七拾錢位の仕拂をするのに壹圓出して、その當然受取るべき三十錢の釣り錢を取らずに歸ります。これは一つには、殊更に金銭に淡泊なのを見せようとする慾であつて、江戸つ子の體面上「あの方は金離れがいゝ」と思はれ、自分は更に立派なものに見へ、自分等の仲間までも立派なものに見られると思ふからです。

これも亦變形した慾なのです。

此の様に人間の生活に深く喰ひ込んで居るのが慾性であります。彼等動物には精

神生活といふ形式がありませんから、此の慾性のみで差支がないのですが、我々人間は此の慾性のみでは、どうも具合がわるいのです。生物學者は「人間は其の身體の組織作用、及び其他の生活に必要な器官に於て、他動物に優越すること多し」と言ひ、進化論者ワールスは人類を目して「全然他の動物と揆を一にせざる一特殊の種類の」と言つて居ります。

人間と、他の動物とを混同して、研究することは出来ません。人間は人間として特別に研究しなければならぬのは、明瞭であります。然らば我々の生活に牛蝨の様に喰ひ込んで居る此の慾性を、どういふ風に扱つたらいいものでせうか。古歌に、

◇世渡りの、道は何ぞと問もせば、慾の淺瀬を渡れとぞいへ、

といふ歌があります。然し我々は此の慾がある爲めに、奮闘もし、克己もし、努力も出来るのでありますから、此の慾を棄て切ることとはどうしても出来ません。所が世の中の實際には、我々の此の慾性をいつでも押へつける一つの大きな勢力があります。自然の中に我々の慾を、妨害するものがあるのであります。それは生、老、

病、死、といふものなのです。この生老病死といふものは、我々の希望、我々の目的、我々の快樂、我々の慾性を、片つ端から打ち壊して居るのです。芭蕉の句に、

◇やがて死ぬ、景色も見えず、蟬の聲

といふのがあります、やがて死ぬその身を忘れて、鶉の目、鷹の目、泥坊の目、血眼になつて奔走する我々の慾性くらゐ、儂いものはないのであります。我々がよりよく生ようとする慾性に對して、必ず死ぬるといふ事實は、大なる矛盾といはねばなりません。古來の聖人、賢者、哲學者はみな此の問題を眞面目に考へたのであります。シヨツペンハウエル曰く、

「天地萬有は素是れ貪婪飽く所を知らずして、唯無窮に追求して休まざる盲目的意志の發現である、即ち上は天體に運行せる諸星體より、下は地上に存在せる山川草木、禽獸魚介の類に至る迄、有らゆる有機無機の存在物は皆是れ盲目的意志の發現に過ぎない、而して其の意志の發現の頂上にあるものは、吾人々類である。故に人類の本性は貪婪飽くなき慾望の傀儡に外ならぬ、是を以て、人類は苦を避け樂を

求め、不足を補ひ不満を癒さんと欲して畢生の努力と最善の方法とを工夫して居る然れども、隴を得て蜀を望むが如く、従つて得れば隨つて求め、快樂の期待に誘惑せられて、長しへに其の苦痛を解脱する事の不可能なる状態に横はつて居る。是れ即ち、人生に煩惱苦痛の因つて起る所以である。故に世界は最悪なるものにして、洵に嫌厭すべきものである。」と言つて居ります。ハルトマンは更に進んで、

「人類社會は、其全般より見るも、將又一個人の場合に於て見るも、疾病艱難不幸災厄の數はるかに幸福快樂よりも多く、心肝に氣伸びくとして愉快に樂しき歲月を送る事は殆んど稀である、然るに世人の斯の如き得難き幸福を追求して止まざる所以のものは、抑々如何なる理由に基づくものであらう乎、そは即ち外でもない。世人は迷妄(慾)に欺瞞せられて其の非を悟らざるに由るからである」と漢の武帝は、秋風辭を作つて、

「歡樂極まつて哀情多し、少壯幾時ぞ、老を奈何せん」

とは歴史に名高い事蹟であります。

これ程までに、慾といふものは不都合千萬なものでありますが、此の慾を棄てるといふ考へも、大に間違つて居るのであります。なせ間違つて居るかと言へば、慾を棄てようといふ考そのものが、すでに慾だからなのです。ですから、ほんとうに慾を棄てたといふ人は、古來から極く少數の人なのです。

慾はその對象に依りて色々種類分けが出来ます。金の慾、名譽の慾、食物の慾、女の慾、など、際限がありません。しかしつまる所前者に申した通り生存慾が根本となります、餘り慾をはりますと古歌にも、

◇慾ふかき人の心と降る雪は積るにつけて道を忘るゝとある如く、しまひには人生の正路を踏み迷ふ様になります。ですから此の慾性に對しては、常に人生の正路といふ標準によりて制御して行く必要が起るのです。

昔し希臘のダイオゼニスは、白晝提灯を提げて、アゼンの町をうろつき、人が不審に尋ねると、「人間を探すのぢや」と答へたさうであります。多くて少ないのが人間、少なくて多いのが借金、古來相場が極まつて居ります、なせ人間が少ないかと

言へば、大抵の人間は、此の慾ばかりで固つた、底ぬけ桶のやうだからです、さもなければ、慾を棄てやう棄てやうとして居る。仙人か天狗の卵の様なものばかりでほんとうに人間らしい人間が居ないからです。

慾一點張でも人間生活ではありませんが、此の慾を棄てやうと思ふのも人間生活ではありません。人間とは元來さうした生物では無いのであります。第一斯んな事をいろいろ考へるが、既に正氣の沙汰ではないのです。来るものは拒まず、去るものは追はず、これがほんとうの自然なのです。この事を「不即不離」といひます。

横山丸三といふ人の歌に、
◇留まらず、身は浮舟と、世の中の、吹き來る風に任せてぞ行け。
といふのがあります。實に味ひのある文句ではありませんか。我々はあまり考へ過ぎるから不幸なのです。犬でも猫でもみんな慾性は持つて居ますが、彼等は慾性の爲めに煩悶などはしないのです。それは彼等が、我々人間の様に考へ込まないから幸福なのです。慾性に對する哲學上の解決は、「一切は一切に含むが故、一切は

一切に任かして置く」といふのです。つまり赤子の様な氣になつて、自分の運命に對しては、素直に、成行に任せておけと言ふのです、「大人は赤子の心を失はず」とは此の事でありませう。

「怒性」

喧嘩

賣られては逃げられぬえ

「怒性」といふものは、生活を脅かされた時に起つて来る本能の作用なのであります。

犬に吠えつかれた猫は、餘裕を持つて逃げ切つてしまふことが出来ないやうな場合には、背中を高くして「フーツ」と物凄い呼吸をします。これは猫の「怒性」の表現された時なので、安全な生活を襲撃しに來た、犬に向つて怒つたのであります。

生きまものと名の付くものは、みな此の「怒性」を持つて居ります。これはよりよく生かさうとする自然の意志なのであります。この「怒性」といふものは蕃殖になると一層強められます。たとへば犬や猫が子を拵へる爲め、つまりその蕃殖を営む時には、なか／＼烈しい争ひをします。猫のさかりの付いた時や、犬のさかりの付いた時は、町内中でそれを煩がる位であります。

さうして彼等も仔を産みます、その仔を養ふには又一層の努力をします、先づあてがはれた箱の中や、日向に出てその仔に乳を飲ませて居る時、知らぬ人間が來て、その仔をいちらうとすれば「ウーツ」と呻つて噛み付きます、此の時の母親の心は、怒性に満されてゐるのです。

此の「怒性」といふものは、恐怖といふものと、餘程に關係が深いのであります。「犬は泥棒の番を爲る」と云ひますが、これは間違ひなのです、夜中異様な足音でも聞くと、犬は先づ耳を聳て、其の音のする方を見ます。そして其の襲撃者がだん／＼近づいて來るとわん／＼吠へ立てるのです。このわん／＼は「怒性」でなく

て恐怖なのです。ですからいつでも犬は逃げながら吠へ立て、居るのです。處で其の襲撃者の爲めに露路の角か、行留りの處へ追ひつめられて、いよく逃げ場がなくなる。「ウーツ」と呻つて初めて怒性を表現するので、彼れの本當の考へは逃げられる丈は逃げようとする事なのです、これは恐怖の念の方が怒性より強い證據であります。「怒性」とは恐怖の頂上に發する本能の作用なのであります。

此の「怒性」が表現された時には、其顔は物凄く格恰になつて、大低な敵でも此の「怒性」に會へば、一度は尻込みをしますのであります。人間の怒性もやはりこれと同じであります。彼等動物よりもより多く脳味噌を持つて居りますから、彼等動物よりも此の怒性が複雑であります。

芝居や、音樂會の開演中に、何處かで赤ん坊でも泣き初めると、座席のアツチでもコツチでも、靜かにしろ、泣かせるな、と言はんばかりに「シート」「シート」といふ聲を出します、それがため母親は耐らず、赤ん坊を場外へ移すことがしばしばあるのです。

此の「シート」「シート」といふのは、やはり一種の怒性であります。それは見物人の精神が、舞臺の上のみに集中して居るのを、赤ん坊の泣き聲のために、集中作用を妨げられて、よりよき見物が出来ないからであります。たとへば、徒然のまゝに碁を圍んで居る際に、突然の來客があつて、その碁を中止しなければならぬいことがあります。そんな時に、そのお客が已を得ない要事の人であつても、内心幾分の怒性を醸すのであります。つまり集中した頭を俄かに中止させられたり、破壊させられたりすると、此の怒性が發するのです。

要するに人間の怒性も、動物の怒性も、よりよき生活を拒まれた時に發するので、根本の原理に於ては同じであります。つまり「賣られた喧嘩を買ふ」のであつて、「喧嘩を賣る」のではないのです。

人間以外の生物は、その生活が單純ですから、この怒性もさつぱりして居ります。彼等は襲撃者が眼の前に居る内は怒つて居ますが、襲撃者が立去れば直に平素に復します。處が人間になると中々然うは行きません、恥辱を受けたり、妨害を加へら

れたりすると、其の怒性は中々消へ去りません。常住座臥ブリーくと脹れ返つて、罪の無い者にまで當り散らします。當られる者こそ迷惑な譯ですが、これはどうにも致方がないので。そして此の怒性が一日の中に何度も繰返す様になると、其のために脳髓が支離滅裂になつて、何んにも纏つた用事が出来なくなります、つまりよりよき生活が出来なくなります、ですから人間は此の怒性を棄てなければ幸福になれないのです。

此の怒性の發現は、其の人々の質に依つて、いろ／＼に違ひます、心理學上人間の質を別けると左の四つになります。

- | | | |
|------------|---------|---|
| 一、膽汁質…………… | 迅速…………… | 強 |
| 二、多血質…………… | 迅速…………… | 弱 |
| 三、憂鬱質…………… | 遲鈍…………… | 強 |
| 四、枯液質…………… | 遲鈍…………… | 弱 |

氣質

意思行爲

聯想思維

感情

此の中で、一番怒性を餘計に持つて居る質は、膽汁質と憂鬱質であります、江戸の名物は火事と喧嘩だといひますが、實際に東京は喧嘩が多い所です。一日市中をぶら／＼散歩して居ると、必と喧嘩の二つや三つは見られます、是れは江戸つ子といふ者に、膽汁質が多いからなのです、江戸つ子は多年の間、氣前を賣る事を見榮にして來ました、これは彼等が武士の爲めに、體面を傷けらるることを恥辱と思つたからです。彼等の多くは職人となつて渡世しました、そして金錢にも權力にも屈しない名人氣質といふものが、彼等の身上であつたのです。ですから氣に入れば無料でもしますが、氣に入らなければ、何んと頼まれても仕事をしないのです、こんな習慣は知らず知らずの間に彼等江戸つ子を膽汁質にしてしまつたのです。憂鬱質はよく婦人に見受けれます、ヒステリーが起つて居る時の婦人の怒性は、中々猛烈のもので大抵の者は避易してしまひます。又男子でも肺結核などに罹るとやはり怒性が多く發する様になります。肺結核にかゝつたから憂鬱質になつたのでなくて、憂鬱質のものが肺結核にかゝり易いのです。そして肺結核になればその憂鬱質が一層

濃厚のうこうになるのです。

多血質たけつしつ、粘液質ねんえきしつのものに怒性どせいが無い譯わけではありません、彼等かれらにも怒性どせいはあります然し膽汁質たんじゅうしつや、憂鬱質いううつせいに較くらべると、其の怒性どせいが隱忍いんにんてき的てきなのであります。つまり胸むねにたゝんで口くちや顔色がんしよくに怒性どせいを現あらはさないのです、けれどもそれを胸むねに疊たんで居ゐる苦くるしみは、膽汁質たんじゅうしつや、憂鬱質いううつせいのそれに較くらべて決けつして劣をるものではありません、いづれにしても此の怒性どせいといふものは、我々人類われんくじんるふに取とつて苦痛くつうのものなのです。すけれ共ども、人間にんげんも生物せいぶつである以上いじやうこ此の怒性どせいを棄すてるといふことは困難こんなんなのであります。

此の怒性どせいは、習慣しゆくわんに依よつて大おほに薄うすらぎます。それは何なんんだと言いへば、一切さいを正直しやうぢきに人ひとに話はなすといふことなのです、思おもふ事ことを正直しやうぢきに話はなすといふことなのです、これに就つて福來博士ふくらいはかせが「言いはんとする心こころ」といふ題だいで面白おもしろい講演かうえんをせられた事ことがあります左さに其の講演かうえんの一節せつを掲かげませう、

「人ひとを押おさへさへすれば、夫それで事ことが治をさまると思おもふと大間違おほまちがひである、一時無理じむりやりに押おさへることが出来できても、何なにかの場合ばあひに其それが化はけて出でる、迷まよふて出でる、人間にんげんの鐘語かねごを

拵こしらへるのならばそれで宜よろしが、人間にんげんの精神せいしんは押おさへ付つけて行ゆけるものぢやない、幾分いくぶんか相當さうたうの方法はうはふを以もつて、其の觀念くわんねんの要求えうきうに満足まんぞくを與あたへてやらねばならぬ、併しかし、如何いかなる方法はうはふで満足まんぞくを與あたふべきかは、實じつに人生じんせいの機微きびんに觸ふるゝことで、仲々なか々な々な定規ぢやうぎてき的てきに公式こうしきてき的に言いふことは出来できぬ、併しかし一例いれいを言いへば、婦人ふじんならば不平ふへいあるときには或ある程度ていどまで其の不平ふへいの言いひ度たい丈だけはせ、それを親切しんせつに聞きいてやることが、婦人ふじんに對たいする一種しゆの操縱そうじゆう法はふである。元來ぐわんらい、婦人ふじんは多辯たべんなものと言いはれて居ゐる。これは、精神せいしん中に思おもふ事ことを言いはずに、包藏ほうざうして居ゐる事ことが出来できぬからである。特に、不ふ平へいなどはさうである。其それを無理むりに押おさへると、必かならず變態へんたいげんしやう現象げんさうを生しやうずる。それで、婦人ふじんの多辯たべんは、神經しんけいの弱よはい婦人ふじんに取とりては、一種しゆの病氣びやうき豫防よぼう法はふである。尤もつとも、多辯たべんは決けつして品格ひんかくのよいものではない。又時またときには、實際じつさい上じやう弊害へいがいを生しやうずる事こともある。故ゆゑに、多辯たべんは道德だうとく上じやうより獎勵かうれいすべきものでないかも知れぬ。併しかし、神經しんけいの弱よはい婦人ふじんに取とりては、右みぎの如ごとき一種しゆの効能かうのうがあることを忘わすれてはならぬ、唯ただ、道學先生だうがくせんせい流りうに品位ひんみが惡わるいと言いつて、無理むりに制せい止しすると、其の人の人格じんかくを病的びやうてきにするやうに

なる。宗教の方には懺悔と言ふことがある、精神中にある罪惡の觀念を、悉く人に向つて言ふのである。自分の信ずる人に、精神中の不平其の他を悉く言つて仕舞ふ。それが救の一つの方法になつて居る。恰度、此と同様に、人に不平があつたらば、其を自分で押へて居ることは苦痛である。己の信ずる人に言つて了へば、其が爲めに精神は非常に平和になる。言はんとする心が言ふ丈を言つて仕舞つた所に、精神中の不安が悉く除かれて仕舞ふのである。」

と言つて居ります。

昔の歌にも、

◇獨り腹たつのを見ればおのづから

心の愚痴を相手なりける

とあります、自分の心にある愚痴や不平、これが怒性の源泉であると思ひ返して自分退治させねばなりません。一切をサラリと観て行く「直心」これが自分の道であると思ふことが肝要であります。

観念。(其二)

癖

どうにもかうにも直らねえ

よく人は「理性の判断は必要だ」とか「動物には理性の判断がない」とかいふことは言ひます。この理性の事を哲學では觀念と申します。

彼等動物の生活を見ますと、それは單に「慾性」と「怒性」とだけの生活のやうに思はれます、彼等は強いもの勝です、強いもの勝でありますから弱い者は、逃げることに隠れることが、上手に出来るやうになつて居ります。

けれども動物が單純に「慾性」と「怒性」とで成立してゐない證據があります。若し「慾性」と「怒性」とで成立して居るものならば、世の中の動物はみんな一種でなければなりません。それが象もあり、鯨もあり、鷺も雀も、金魚も蜻蛉も、犬も猫も蚤も蚊も、殆んど數へ切れない程種類のあるのは何んのためであります。

か、そして又四つ足もあれば、二つ足もあり、飛ぶものもあれば、走るものもあり泳ぐものや、這ふものや、角のあるものや牙のあるものや、美聲で囁するものもあれば、螢のやうに怪光を發する虫もあるといふ風に、種類ばかりでなく其の動作も又無数の差別があるのは何んの爲めでありませうか、是れ等の事實から見ても世の中の動物が單に「慾性」「怒性」ばかりでなく、慾性、怒性の外に何かなくてはならない筈になるのです。それは何んであるかと言ふと「觀念」といふものなのです、この觀念といふものが「慾性」「怒性」の外にあるために世の中の動物にも魚介にもいろいろの差別が生じたのであります。

「怒性」とか「慾性」とかいふものは、動物、魚族、鳥類、昆虫の様な自ら運動や移行の出来る生物のみが持つて居るものでありますが、茲にお話をする觀念は是等動物類ばかりで無く、世の中にありと總ゆる物。山でも、海でも、木でも、石でも草でも、水でも、火でも、埃でも、微菌でも、此の觀念を持たぬものはないのです世の中に一杯満々て居るのが觀念で、觀念のない處に物はないのであります。

此の觀念は、文字に現はしては單純なる二字に過ぎませんが、事實上に於ては、此の觀念の種類は何千萬億に上るか、到底數字を以て現はすことが出来ない程の、多數のものなのであります、此の觀念を、判り易い言葉にして見れば、性質、とか氣質とか、理性とか、意志とか、いふものに當條まるのです。

シヨツペンハウエルは、宇宙は意志也と申した。此の言葉を、宇宙は觀念也、と申してよろしいのです。哲學者其人に依つて、理性といつたり、意志といつたりして居ますが、それ等はみな此の觀念の事を言つて居るのであります。

著者が、今述べた處の、實在、物質、意志、有と無、空、時、量、質、原因、結果、運動、力、形式、轉化論、物質現象、慾性、怒性の十七項は各別々のものではなくて、實は此の觀念の内容を、抽象的に説明したものであるのです。ですからシヨツペンハウエルの如く、「宇宙は意志也」の僅々大字でも言ひ盡くせるものなのですが成るべく判り易くとの趣旨の下に、くだしく説明した譯なのです。

さて此の觀念を判り易く述べませう、譬へば、犬の形と猫の形との相違でも判り

ます。犬は活潑で大ザツバなものですが、猫は隠忍的で室内にばかり居たがる女性的なものです。犬は寒い事は平氣です、雪でも降ると却つて元氣になりますが、猫は非常の寒がりです、夏でも火鉢の猫板の上に跪るものです。泣き聲や、形が違ふばかりでなく、毛色や爪が違ふばかりでなく。その喰料の嗜好までも違ふのです。これは違ふのが當り前ですが、此の相違は、猫の持つ觀念と、犬の持つ觀念との相違の爲めに差別せられるのです、馬でも、牛でも、鼠でも、それ／＼はみんな違つた觀念を持つて居ます。觀念が違ふから、其の形や性質が違つて來るのです、ですから觀念は、物質的には形といふ相を以て顯はれ、精神上には性質といふ相を以て顯はれるのです。

犬と言つてもさうです。同じ犬であり乍ら、男犬の持つ觀念と、女犬の持つ觀念とは又違ひます。又男犬にしても、毛色や形が違ふごとく、一疋、一疋が持つ觀念は皆それ／＼に幾分づゝか違つて居るのです。たゞ大體が共通して居るから、其を犬の種族に別けたり、猫とか、馬とかいふ風に大別する丈なのです。

一つ一つに違つた觀念を持つて居るのは、犬だの猫だのといふ動物ばかりではなないので、山川草木、禽獸魚介は皆それぞれに違つた觀念を表現して居るのです。たとへば一本の木につく葉や花までも、よく調べるとその葉の一枚一枚が皆違ひ、その花瓣の一片一片みんな違つて居るのです。この地球とは、そつくり違つたものばかり集り合つて居る、大きな差別の塊なのであります。英國の觀念論者バークレー氏はこれに付いて面白い事を言つて居ります。

「此の世の中に性質のないものは、あるべき筈がない。物に性質が賦與されて居るのでなくて、性質に物が賦與されて居るのである。故に物とは性質の事と思へばいゝのである。たとへば櫻の花から、形といふ性質、色といふ性質、嗅ひといふ性質味といふ性質を取り去れば、残るものは何もなくなる。獨り櫻の花ばかりでなく、世の中の一切の物體は、是等性質の集團である、我々の觀念から、形、色、嗅、味、を取り去れば櫻の花はなくなる。物體といふ物體のすべては、皆觀念の束なのである。」

ヒエーム氏は有名なる觀念一元論者であります。氏はパークレー氏の如く諸物體は皆觀念の束であることを認めると同時に、宇宙一切を創造するものの本體も此の觀念の束であると言つたのであります。氏が此の見解は、大膽といはうか、臆斷といはうか、唯々驚くの外はないのです。今日の哲學でも世の中の物體はみな觀念の束とは認めますが、世の中の本體を觀念の束と認める學者は一人も無いのです。ヒエーム氏自身も其の晩年に至つて、此の見解の誤りであることを發見して、その著述の一切から、此の一元論を抹省してしまひました。是れは抹省するのが當然であります。ヒエーム氏の如き大天才、大學者ですら感違ひをする程、此の觀念といふものは、微妙な、精細な、働を以て、此の世の中に充滿して居るものなのです。觀念とは此の様なものであります。そして世の中の物體でも生物でも、それ／＼に持つ觀念は、其の生物物體にとつては、特長であり、癖であり、缺點があるのです。生物は、みな、それ等屬性的の、特長、癖、缺點に氣付かずに、たゞ盲目的に自分の觀念を發揮しやう發揮しやうと努力して居るのです。

同じ馬であつても、足の早い馬もあれば、力のある馬もあり、從順しい馬もあれば、肝癪持の馬もあるのです。足の早いのは乗馬に使はれ、力のあるのは荷を曳くのに重寶がられます。從順な馬は主人に可愛がられて、肝癪な馬は、鞭や棒で打たかれるが如く、其等が持つ觀念に従つて、損の立場と得の立場とに別れて來るのです。此の事を我々は運命と申します。たとへば、亭々と聳ゆる松の木のように彼れは、自分の損とか徳とかいふつもりでなく、唯觀念の命するまゝに、よりよく自己の觀念を發揮して居るだけなのです。それがため、根から引抜かれて庭の觀賞に使はれたり、又切倒されて、材木や薪になつたり、基礎工事の杖として永久に地中に埋没せられたりするのです。

世の中一切の物體生物から、此の觀念といふものを引去れば、従つて幸運も薄運もなくなくなつてしまふのです。幸運薄運がなくなるばかりでなく、物體そのものもなくなつてしまひます。ほんとうの空になるのです。ですから、五體を揃へて居る我々は、生きて居る以上此の運命といふものから、離脱することは出來ません。我々

は死んでも、ほんとうの空にはなれません。我々と一緒に何處まで、も地獄の底へまでも、必ずくつついて来るのが此の觀念といふものなのです。「慾性」や「怒性」は、其の人の考へ方で、或る程度まで棄て去ることは出来ませんが。此の觀念といふものを、我々が棄て去ることは、絶対に出来ないものなのです。何故とならば我々それ自體が感念といふものだからであります。此の觀念に付いてまだ、面白い話
 が澤山残されてありますが。それは後章觀念第二に於て詳しく述べることにします。
 兎に角此の觀念問題は、哲學上、尤も重要な位置を占めて居ることは、お承知願ひたいのです。

觀 念。(第二)

鏡

其のまゝに向ふに寫る我が姿

觀念第一に於て、世の中の事物一切は觀念の束であることを申し上げました、そ

れには、特長とか缺點とか癖とかいふ屬性的の働きがあることを申した、又觀念それ自身は、直に運命を形づくるものであることを申し上げまして、既にお承知のことと存じますから、本章に於ては、觀念の密着力、及び我々人類の持つ觀念及び以心傳心の事に就て述べませう。

猫でも、犬でも、馬でも、猿でも、みんな子を産みます、そして其の生れた小供を見ますと、必ず、親に似て居ります。男親と母親をつきませた様な子供が生まれ

此の頃東京市中では犬が流行しまして、中々立派な犬が居ります、そしてその立派な犬は種犬として、必ず飼主は、その種犬に小供を産まして、其の立派な犬の子孫を絶やさない様にします、そして生れた小供は必ず其の立派な種犬に似て居るのであります。或る畜犬家が、日本中の犬を全部調べた處が、今や日本の國には純粹の日本犬といふものが居なくなつた然うであります。これは不知不識の内に日本犬と洋犬との雜種のものに變化してしまつたのです。最近にはブルドックといふ妙

闘犬が流行して居りますが、やがては現在の犬の質が、ブルドックの質と混つたのに變化するかも知れません。

親に似ない子は鬼つ子と言ふ如く、人間の子もやはり両親に似て居るのであります。これは似るのが當り前で、別に不思議はないのですが、どういふ譯で似るといふ點になると、只子供は親に似るものだといふ丈で、確乎たる答辯が出来にくいのであります。世の中にありとあらゆる事柄で、偶然といふものは一つもある理屈はありません。子供が親に似るのを偶然の出来事とは見做し兼ねます。必ず其處には似る理由が無ければならないのです。俗にいふ遺傳とか、血がつどくとかいひますが、此の遺傳には譯がなければならぬのです。

遺傳は人間ばかりでは有りません、世の中にありとあらゆる生物は、みな遺傳します、それは桃の實をまけば、其の桃の實がやがて木となつて花を咲く時、必ず元の親木と同じ様な花を咲かせます、紅い花なれば、紅い花を咲かせ、白い花なれば、白い花を咲かせます。

生物といふ生物は、皆な、兩性に別ちます。動物に牝牡があり、植物は雄蕊雌蕊の花を咲かせます。植物の花時には、不思議に風が吹きます。此の風の爲めに、植物の花は蕃殖事業を果たします。或は精密を以つて蝶を招き、蕃殖事業の仲介をそれにさせたりします、一切の生物が兩性に分たれてある唯一の目的は、同種族の蕃殖といふ仕事の爲めなのであります。下等動物や、或る種の植物になると、此の兩性がなくなつて、分身といふ事をします。それは、植物なれば、枝を折つて挿木をしたり、又は繼木をしたりする様なものです、微菌などは、全部分身を以て蕃殖して居るのです。

子供が親に似るのは、實は遺傳ではなくて、全部分身なのであります。一個のものが二つになつたのですから似るのは當り前です。蕃殖して生れた子供は儲けもの様に思ひますが、實は儲けものでなく、我身を割いたものなのです。自己の分身が子供なのであります。

それならば、人間でも犬でも猫でも男女兩性に別れる必要はない、男は女がなく

とも分身し、女は男がなくとも分身してよささうに思はれます。恰度微菌が分身したり。植物の挿木や、継木の如く、單純に分身出來さうなものだといふ、疑問が湧いて來ます。處が事實に於て、そんな馬鹿げた分身は、犬でも猫でも、馬でも、更に最高生物である我々人類はなし得ないのであります。さらば、どういふ譯で、微菌や下等動物が單純に分身作用が出來て、比格的程度の高い生物になると分身作用が出來ないが、牝牡といふ兩性を合せなければ分身作用は出來ないか、是れは茲にお話をする觀念といふ事に依つて直に明瞭になります。

分身は、觀念の密着力に依つて行はれるのです。世の中の生物は一切觀念の束であることは、第一章に述べた通りですが、下等生物や微菌の如きは此の觀念の束が極く／＼尠ないのであります。微菌や下等生物の生活は、みんな何者にか寄生しなければ生きて行かれませんが、そして其の寄生する場所は、必ず自己の生存に適したものでなければならぬのです。判り易く申し上げれば、椎茸は、椎か、櫛か、柗の木かに寄生する如きです。梅や櫻の木に椎茸は寄生することは出來ないのであり

微菌でもペスト菌が鼠に寄生することが容易であつて、猫にはどうしても、寄生することが出來ません、これはペスト菌を組織する觀念そのものが、鼠を組織して居る觀念そのものと相融和するものが有るからなのであります。

此の融和は、微菌や下等動物ばかりではありません、例へば金と銀とを溶かして此の二つのものを混合することが出來る様なものです。又金と銅とも混ぜて溶かすことが出來ます、これは、金とか銅とかいふものが、銘々に別々の質であつて、然かもそれぞれに共通する融和性を持つて居る證據であります。同じ溶けるものでも金と硝子とを混ぜ合わせることが出來ないのは、金の觀念と硝子の觀念とが相融和しない觀念であるから混ぜ合ぬのであります。

ペストの微菌が持つ觀念が、鼠の體內に入つて、鼠の觀念と相融和するのは。一つの蕃殖事業であります、そして其處に自分の分身を産み出しますが、それは、ペストの觀念と、鼠の觀念とが合さつて出來たるもので、幾分づゝか、最初の原菌と相異して居るのであります。此の意味に於て微菌そのものも、多くの體內をくぐる

ほど、だんく變質して來ます。これは醫學上より見ても實際さうなのです、**微菌**が多くの體內を潜るほど、其の毒分が増すといふことは、疑ひのない事實なのです。この様にだんく、變質に變質を重ねた結果は、**微菌**そのものも、最初の働きを失なつてしまつて、人體にも**又他の生物**にも害を及ぼさないものにまで變質してしまふのです、茲に至つて流行病も全々終熄してしまひます。

ペスト菌や、**椎茸**が自分と相融和する觀念に依つて蕃殖する如く、人間でも、**犬**でも、**猫**でも、**虎**でも、自分と相融和する觀念を求めて蕃殖します、**犬**に取つて一番觀念が共通するのは、**移行の出來る動物**が、**牡牝の兩體を合せて、初めて蕃殖事業を營むのを、何か特別の動作の如く考へる人もありますが、それはやはり椎が栗や、檜の木に依つて蕃殖を營む如く、ペストが鼠に依つて蕃殖を營むと同じで觀念の密着そのものが、蕃殖となるのであります、人間の夫婦でもさうであります「縁は異なるもの」の譬への如く、其の夫婦の性格には何處か相共通する性質がある**

のです。觀念の融和しない夫婦は、決して永い月日を共に暮らすことは出來ません「似たもの夫婦」とは偶然にも此の觀念の融和力、密着力を言ひ現はして居るのです。

ペスト菌が鼠の體內に入つて、自分と同種族のものを殖やすのは、一面に於て鼠の肉體を亡ぼして居るのです。殖へるには亡ぶるものなければ殖へないので。亡びた分量丈が形式を變へて新しく存在するのです。これは、實在や物質にも、詳しく述べた通り。物質不滅といつて、哲學上にも科學上にも動かす事の出來ぬ確實の議論なのです。ですから蕃殖といふ事は、そこに新しいものが、産れ出るに就ては、必ずそのものの分量だけ或る物質の量丈が減じなければならぬのです。

微菌の如き觀念の單一な生物は、自分に共通せる鼠の肉體を吸集して、一を二となし二を四となすといふ風に、蕃殖して行くのであります、高等生物になればなる程、觀念の束が殖へて行つて、人間になると、その觀念の束の大きさは殆んど數へ盡せない位の多數になるのです。この束の殖へたといふ事は生物そのものの生活

様式の復雑さを表はします。殊に人間に至つては、蕃殖ばかりの觀念で出来上つた大束では無いのであります。菌や、微菌の如き單一なもの仕事は、蕃殖以外にはありませんが、牡牝と別れて居る生物は、總て蕃殖以外にそれぞれの仕事があるのです、殊に人類に至つては此の仕事が無數に澤山あるのであります。蕃殖の外に仕事をする觀念がある爲めに、一個のものが、二つに別れて居るのです。

動物や鳥の牝牡を比格しますと、必ず牡の肉體は強壯に出来て居ります。角とか牙とかいふ武器を持つのは牡ばかりです、鶯でも、鹿でも、牡ばかりが鳴きます。馬でも牛でも牡の方が力があります。人間でも男と女と比格すると遺憾ながら、其の頭腦の鋭敏、勇敢、智力、緻密に於て、又肉體上の剛健さに於て男の方が優越しております。男の體質は社會に活動して、或る仕事をなすべく先天的に出来て居ります。女は此の男を扶けつゝ、又男の及ばない蕃殖事業を果すのです。男が肝腎で女は男の爲めに造られたものだ、なぞといふ人がありますが、これは飛んでもない誤りです。元來男と女を別々に考へるからいけないのです。基督も「二つのもの

一體となるべし」といひました。男女の一組を以て人間といふのです。男ばかり、女ばかりでは共に人間の片割であります。片割では分身が出来ません。

ですから夫婦といふものは、互に足らざる所を相扶け合つて、自他の考へなく、さながら一心同體の如く親和すべきものなのであります。これを觀念の密着力といひますが、この密着力は、もと一つのものが二つに割れたのですから密着したがるのは當り前なのです。ですから動物や人間が子を産む理屈も、微菌が分身をする理屈もつまり同じものなのです。つまりどつちも分身なのであります。

分身ですから親に似るのです、此の密着力は分身——蕃殖事業ばかりでは無いのであります。此の外に以心傳心といふことをします。これは順序の上から後に述べることとして、我々人類はどういふ觀念を持つ生物であるかをお話し致しませう。世の中にありと總ゆるものは觀念の束であるとは、第一章に述べた通りで、既にお承知の事と思ひます。此の觀念の束は、生物それぞれに依つて束の大きさが違ふのです、一束の数が違ふのです、十の觀念の集りもあれば、二十の觀念の束もある

のです、束の数は下等生物ほど少なく高等動物となればなる程、多くなります、さうして人間に至つては、驚くほどの大束で、犬や猫の何千培だか何萬倍だか到底數へつくされぬ程の大束なのであります。

此の束の大小は、生物そのものの發育程度に依つて直に判るのであります、猫は生れて三ヶ月経てば、我々人間の一年振に相當するさうです、さうして九ヶ月経てば猫は大人となります、鳥などは生れてすぐと飼を拾ひます、發達の早いものほど、觀念の束は小であり、發達の遅いものほど、觀念の束は大なのであります。人間は二十五歳とならなければ、發達の頂天に達しないさうですが、これとてもほんとうの事は判るものではありません。發達の遅々として居るものは、「大器晩成」の譬の如く、割合に偉大なる人物になれますが、あまりに發達の早い「早熟」の者は、比格的に偉大なる人物にはなれないものです。小供の時に、行末頼母しいと思つた者が、存外役に立たない人間になることが多いのであります。これはその人の觀念の束が小さいのだと見ればよろしいのです、けれども、是の發達の遅速ばかりで、



人間の賢愚を律する譯には行かないのであります。發達の遅いものには往々にして此の觀念の束の小さいものがあるのです、又「早熟」のものでも、其のものの思想に、常に進境の跡を示すものには、觀念が小さいといふ譯には行かないのです。要するに日に月に進歩して行く人間は、觀念の束が大きく早く進歩が留まるものは、觀念の束が小さいと見れば差支がないのです。

斯んな譯で下等動物になればなるほど觀念の束が小さく、微生物の如きは、或は觀念が一つかも知れないのです、ですから猛烈の「早熟」で生れるとすぐ大人の様なものです、一つの微生物が一時間に何萬とかに殖へるといふ話は我々がしばしば醫者より聞かされる處ですが、實際それに相違はありますまい、觀念の單小なものほど成人する事は早いものなのです。

人間の顔や容姿は順次に變つて行きます。これは毎年寫眞を寫して見ればよく比格出来るのです。これは、觀念そのものが自分と共通せるものを選んで生活して居るうちに（喰料でも。技能でもさうです）不知不識に變質して行くのです。微生物で

も前に甲上る通り永い年月の間には其の最初の原菌の質を失ふまで變質して行きま
す。世の中一切のものは、みんな順次に變質、變化して居るのに相違ありません。
是れは學術界を風靡しつゝある有名な進化論であります、誰れでも、心靜かに世の
中を見渡せば、人間初め一切の生物は刻々と何者かに向つて進化の道程を履んで居
る事に氣が付きまます。昔、希臘時代に於ても、早く一部の學者は、此の進化の働
きに注目しておりました。例へば、アナクシマンデルの天地開闢説の如きであります
曰く、

「人類は其の生存の始めに當つては、今日とは全く異なる形體を具へ、而して又魚
鱗に等しきものであつて、水中に棲息せしものなりしが、漸次歲月を経過するに従
ひ、水中より陸上に出で來つて、その子孫を蕃殖するに至り、遂に今日見るが如き
形體を具備するに至りしものである」と説いて居ります、併し進化論が、學理的に
尤も鮮明に唱道せらるるに至つたのは、最近十九世紀の現象で、其の主唱者中の殊
勳者とすべきは、佛國のラマルク、英國のダーウキンの兩氏であります。

著者は茲に進化論を御照會することを避けます。何故とならば、進化論中、一切
の生物が互に交渉しあつて順次に變化するといふ點は、間違のない理論であります
が適者生存といふことを唱へて、不適者は自然淘汰の運命に逢つて世の中から葬ら
れるといふ理論を唱へるからです。生存に適した觀念のみが發達して、生存に不適
な觀念は世の中から消滅してしまふといふ不思議の議論を唱へるからなのです。こ
れは進化論といふものが、單に世の中の進化のみを觀察して、全體を觀察せない誤
りなのであります。進化といふことにのみ執着し過ぎて居る、一般論法なのであり
ます。著者は本書轉化論に述べた如く、世の中一切の生物は、進化するのでなくて
轉化するのだといひました。ペスト菌が、いろ／＼の體內を潜る度毎に、毒素の働
が違つて來るのは、進化でなくて、轉化なのであります。變質なのであります、我
々人類の祖先が、猿であつたか、或はアナクシマンデルの言ふごとき、魚鱗の如き
ものであつたかは知りませんが、兎に角、我々は永い歲月の間に變質をした事に相
違はありませぬ、生物學者の言ふ如く、我々日本人は、マレイ人種、アイヌ人種と

亞細亞人種との雜種であるかも知れませんが、我々が雜種になつたから進化したとは言はれませんが、若し、然うなれば、日本人と歐米人との間に生れた、アイノコが、日本人よりも歐米人よりも進化して居ると言はなければならぬのです。これは變質したので、進化したのではありません。従つてアイヌ族、マレイ族が亡びたので無くて、我々日本人の組織體内に其等の種族はチャンと保存されてあるのです。純日本犬が自然淘汰の運命に逢つたのでは有りません。それ等のものは、現今居る犬の組織體内にチャンと保存されて居るのです。ですから觀念といふものは、永恒に不滅のものなのです。

進化論者の言ふ如く、人間の元は猿の様な動物から進化したなどといふ議論は、我々は少しく考へねばなりません。進化するには進化する丈の觀念を生れた時から持つて居たのです。自分にそれ等の觀念の持ち合せがなくて、偶然に變質することはお出来ません。青酸と銅とは直接に混ぜ合さりません、水と油とは密着する所か互に逃げ合ひます。ですから我々人類の祖先といふものは、何ういふものであつたか

は判りませんが、今日の我々と同等の觀念の量丈を持つて居たものに相違ないので、一種特別の生物であつたに違ひありません。變質するのは其變質に相應しい觀念を、先天的に持つて居なければ、變質することが出来ないので。若しすべての生物が度なし變質出来るものならば、此の地球上には、將に人間にならうと生物が居なければならぬのです。人間を百といふものに譬へれば、九十の生物だの、八十の生物だのといふものがなければなりません。そんな人間とも、動物ともつかないものがあつては大變です、猿がだん／＼に進化して来て、山からポツリ／＼と降りて来て我々の仲間入りをするといふことになつては大變です、又、土でも、水でも、火でも、空氣でもが、ドシ／＼進化して行つたならば、まるで目茶口茶ではありませんか、ですから進化論といふものは、眉に唾をつけて聞かなければならぬのです。人類は其の祖先の時から今日に變質出来る丈の觀念を持ち合せて居たものなのです。

進化論者の言ふ如く、すべてのものは刻々と變つて行きます、けれどもその變質

の道程は、常に同一の觀念を辿つての密着力ですから。變化すると同時に還元をするのです。地球上を輝らす太陽といふものの働きは、すべての物を其の觀念に従つて還元させる大なる運動なのであります。水とか、土とかいふものが變質しないのは、此の還元運動の爲めです。水や、土や、空氣の觀念は、自分自身が變質しやうとするのでなくて、世の中のものを、みんな自分に變質させやうとする、運動なのです。あらゆる物の中から、自分と共通性の觀念を引抜いて、それをみな、水に、土に、空氣に、しやうとして居るのです。地球上の事物一切は、みなこの進化と還元との兩面（其實は一つの運動です）を持つたる、觀念の入り亂れた、密着力で出來上つて居るのであります。

シヨツペンハウエルは、「宇宙は盲目的意志也」と申しましたが、それは此の觀念の盲目的の密着力を指したのであります。天源術に於ては、此の世の中には十二の氣質があると申して居ります。カントは我々の認識力には十二の範疇（いがた）があると言つて居ります。佛教では、地、水、火、風、の假和合したものと云つて居

ります。が、それ等は兎も角我々が轉換しやうとする意志も、蕃殖しやうとする意志も、慾性も、怒性も、力も運動も、みな此の觀念の密着力なのであります。

扱て我々人間は、どんな觀念の束を持つて居る、生物なのでせうか、我々人間には世の中の總らゆるものと、交渉があり、合同があり、流通があるので、又我々の精神（感念の束は）世の中のすべてのものを理解出來ます。理解が出来るのは對者と同一の觀念が有るから、理解が出来るのです。此の意味から言つて、人間は世の中の觀念を全部持つて居る生物となるのです。それは恰も人間を中央に置いて、すべてものが生活をして居るやうに思はれるのです。此の地球は人間本位の場所かと思はれる位です。我々人類の持つ觀念は、地球上のすべての者を、我々の生活の爲めにドシ／＼と改良します。すべての天産物は、やがてみんな、人工的産物に取つて替るかの感じがします。飛行器、潜水艇、有毒瓦斯のやうな武器、電氣の應用、食料品の製造、人工的植物採培、人工的養魚、或は將來は降雨までも、人智の應用に依つて支配せらるるに相異はないのであります。不可抗力なるものは、人智の發

達の爲めに地球上より全然除去されるかも知れませんが、我々人類の観念は、此のやうに驚くべきものなのです。我々人類は、此の世の中にありとあらゆる物の、真相に没入し、同化し、改良せらるゝのは、我々人類が一切の観念を具備して居る證據でありませぬ、我々は、世の中に數限りなくある観念を全部持つて居るのであります。従つて人智の發達といふものには、限度が無いのであります。シヨツペンハウエルは、「宇宙は意志也」と言ひました、然らば、一切の観念を持つて居る我々人類は恰も、宇宙の縮圖の如きものであります。

茲に我々が、兎角優越せる生物として、己惚心で起し易いのであります。宇宙の縮圖であるからとて、威張る事は出来ません、成程、我等の観念は留度なく發達はしますが、その發達の道程は宛がら、緒環のやうにぐるぐると廻轉するだけなのです。「歴史は繰返すに過ぎず」との格言の通りで、文明も野蠻もその實質に於ては進歩でも退歩でもないのです。我々人類の観念は常に、我々人類の幸福の爲めに費されるものではあります。此の観念をいくらか働かしても、人類全體に幸福を齎

すことは出来ません、堯舜の時代といふものは、理想のみで事實には實現すること出来ないのであります。これは、我々の観念そのものには、進歩と同時に還元といふ力があるために、進歩ばかりすることが出来ないものであります。丁度、鎖につながれて居る犬のやうなもので、進むと同時に、跡に引戻されるからなのです。ですから人間は観念が大束といふ事のみで、自負することは出来ないものなのです。スペンサーといふ哲學者は、此の観念の働は、やがて新らしきものを産み出す、進化の過程と考へたのです、つまり自惚れたのです。處が事實に於て我々人類及び一切の物象が、観念の入亂れに依つていろ／＼に變化するとも、観念自身の保存的の規律は増減出来ないのです。即ちエナーチーの總量に増減がないものなのです、つまり物の變化と——その變化に伴ふ力の性質的變化は、観念、即ちエナーチーの分布を不平均にさしたつもので、其實はいつも等質的にさしたりして居る丈で、進化と見らるゝそのものは、變化のみであつて、それは墮落の法則に従ふものとなるのです、最初に、すべてを進化と見做したスペンサーも、観念それ自身は、保存律から推理

しても、有機組織の解體を必然ならしむるものだと説明して居ります。ラランドは極端なる例話を以て觀念そのものは、進化と還元の活動を繰返して居るもので、その實體に於ては、何等の變質、動搖も無いものと言つて居ります。氏は、
 「よしんば世界の過程が、突然倒逆されたとしても、保存律の眞理は動かぬ、例へば、樹木が高く延びる順序を倒さまにして、大きな樹木がだん／＼小さくなつてしまいに、種子に變じるとも、人間が老人から倒さまに、次第に若やいで、最後に胎兒になるとも、觀念そのもの、保存上の法則には、何の影響もない、そして、かゝる極端なる假定と雖も、強ち單なる空想として一笑に附し去るべきものでない」と言つて居ります、我々人間はその豊饒なる觀念を以て、世の中の一切を改良しそしてだん／＼進歩、進化することが出来ると思ふのは、大なる誤りであり、一歩進めば、他方で一歩還元し、百歩進めば、他方で百歩退くのです、常に進歩も退歩もしないのであります。此の如く我々の觀念は數限りなくあり、又色々と差別の相を持つて居りますが。其の實相、——根元に於ては一味平等となつて居ります

般若心經に、

色は空に異ならず、空は色に異ならず、色即ち是れ空、空、即ち是色、受、想、行、識、亦また是の如し、舍利子、(佛弟子を呼ぶ)是の諸法の空相は、生せず滅せず、垢つかず淨からず、増さず減せず、是の故に空中には、色なく、受想行識なく眼耳鼻舌身意も無し、色聲香味觸法も無く、眼界も無し、乃至は意識界も無く無明も無く、亦無明の盡くすることもなし、乃至は、老死無く、亦老死の盡くすることも無し、苦集滅道も無く、智も無く、亦得も無し。

と説いてあります。宇宙に満ち／＼てさま／＼の働きをする、此の觀念の差別相は、實はそのまゝ大なる平等なのであります。ですから觀念の總量には増もなく、減もないのです。

此の觀念の大束を持つて居る。我々人間は、觀念を發揮しつゝ此の觀念に支配せられて居るのです。此の觀念の爲に運命といふものを形造るのです。是れは第一章

に説いた通りですから茲には重ねて述べません、次に感念の以心傳心を述べませう
竹内無有といふ人の歌に、

日々に看板次第の客が来る儲けも損も我が腹の品

といふのがあります。譬へば呉服屋の看板をかけてあれば、呉服を買ふお客が来ます。牛肉屋には、やはり牛を買ふお客が来ます。まさか牛肉屋に呉服を買ひに行く人もありません。我々が金銭を借りる場合でもさうです。甲へ行かうか、乙へ行かうか、丙へ行かうかと考へる時、其の内の一番お金を借り易い處へ行くやうなものです。あの人は金は何萬も持つて居るけれど、なんだか、あの人には話がしにくい。あの人は、きつと貸して呉れるには違ひないけれど、あの人の顔を見ると、なんとなく言ひ出しにくくなるから、よさう。それよりは、あの人ならばお金は有つても無くても、語がし易いから、あの人に頼まうといふ按梅に、世話すきの観念を持つて居る人の處には、四方八方からいろいろの事を持ち込んで来るのです。喧嘩をする人でも然うです。「相手變つて主變らず」の譬への如く。喧嘩好の看板を掲げ

て置くから、四方八方から喧嘩の材料を其邊へ持ち込んで来るのです。「笑ふ門には福来る」といふ譬への如く。常にニコ／＼して居る人の處には、ニコ／＼する様な事が持込まれて来ます。これも観念の密着力と見ればよいのです。

我々人間は此の観念の大束を、いつも平均に統一的に使ふべきものなのです。それが人間の一番よりよき生活なのです。處が人間は其の観念をいつも全部は使つて居りません。また中々理屈通りに使へるものでは無いのです。例へば音楽を聞いて居る時、其の人の観念は、音楽を聞く観念しか働きません。面白い小説を読む時でも、やはりさうです。軍隊生活をして居る間は、やはり軍隊氣分になります。マラサン競争には走るといふ考丈です。斧を揮つて、薪を割る心持ちで頸髭は剃つたら大變な間違になります。人間の観念といふものは、對者に應じて其場、其時に用ゆる観念が、一々に違ふのであります。

人間同志の交際も、これと同じであります。元氣のいゝ活氣のある人と話をして居ますと、こちらにも不知不識に元氣がよくなつて、共に釣り込まれて元氣がよくな

ります。柔和な人と話をして居ると、こちらも柔和になります。難有い法話や、お説教を聞いて居ると難有くなるのであります。相手そのものの心持ちと、そつくり同じ心持ちになるのが人間の観念といふものであります。これを逆に言ふと、此方の心持ちと、そつくりの心持ちに相手になるといふ事です、これは主客を顛倒したただけで同じ事なのです。

◇そのまゝに、向ふに寫る我が姿、直して見よや、おのが姿を、

といふ歌があります、此方が穏やかであれば、怒つてる人も穏かになります。此方が理屈を列べると相手の人も負けずに理屈を列べます。観念の密着力といふものは此の様に以心傳心的のものなのであります。黒住左京は、

◇立向ふ人の心は鏡なり、おのが姿を寫してやみん。

と詠じました。立向ふ人の心は、我が心を寫して居るのであるから、對者の心を見て、我が心の如何を知ることが出来るのです。「我若し人に辛らければ人も又我に辛し」の通りであります「其の人を知らんと欲せば其の友を見よ」の譬へは偶然に

も。此の以心傳心の消息を語つたものなのです。我々人間の價値とすべきは、此の観念を常に統一的に働かすことなのです。悲しい哉、人類は滔々相伴ひて、此の観念を偏頗に使用して居るのです。まるで寶玉を抱いて、貧里にさまよつて居るのです。カント曰く、

「宇宙の事實は吾人に道徳を誨ふ」

と氏は純正理性批判の立場にあつて、吾人に道徳の必要を力説した哲學者であります。我々は此の観念の用ひ方一つに依つて、佛にも、又鬼にもなられるのです。釋尊は、

佛、菩薩、聲聞、緣覺、天人、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄

と、四聖六凡の十界に別けました。観念の成金である吾人は、願くば人間の皮を冠つた畜生や、人間の皮を冠つた餓鬼にはなりたくないではありませんか。我々人間に精神修養の必要は、哲學上、尤も瞭のことであります。

此の観念のお話は、甚だ煩雜でくだいものであります。哲學上尤も重要な位

置を點めて居る項でありますから反覆してお覽を願ひます。尙認識論に於ても、美學に於ても、倫理問題に於ても、此の觀念のお話を異つた立場から申上てありますから、彼は相對してお覽を願へれば更に明瞭にお判の事と思ひます。

純正哲學

手品の種

凝つては思案の外

茲に述べる純正哲學は、早く申せば哲學の本論であります、著者が今まで述べて來ました、實在より怒性までの十七項は、實は此の本論をお話する前提に過ぎないので、哲學上、最も重要な位置をしめるものは、前章觀念と、こゝにお話をする純正哲學なのであります。哲學上、純正哲學といふ四字は、人々に依つていろいろに解釋されて來ましたが、著者はそんな八ヶ間敷い考へで純正哲學を述べるのでは

まのせん。たゞ純且つ正なる哲學の實體といふ意味であります。

前項觀念までお読み下すつた諸君は、如何なるお考へになりますか、世の中とか宇宙とかいふものを、何んだか、ガヤ／＼と六ヶ敷しいものに扱ふのが、哲學といふものかしら、とお考へになるでせう。實際哲學の議論といふものは、何萬頁の本に書いても、又一生涯お話をしても、頭が痛くなるやうな議論ばかりで際限がないのです、けれども、哲學もだん／＼奥深く進みますと、議論や理屈を超越して來ます。

著者が今までに述べた實在より觀念までは、一切世の中の現象であります。自然の有様であります。觀念の項にもくどく／＼と述べた如く、千差萬別で不思議極まる世の中の實體は「微妙なる觀念」なのであります。

さらば天體に運行せる諸星體より、下は山川草木、禽獸魚介の類まで、一切觀念の束であるとしたならば「觀念の實體は何ぞや」といふ疑ひが起ります、判り易く申し上げれば、假に世の中の主宰者を神として、「神とは何ぞや」といふ問題であり

ます。我々は別に哲學の御厄介にならなくとも、世の中の微妙の働きを知ることが出来きます。我々の髪の毛の一本を引ぬいて、チーツと凝視すると、不思議千萬、その微妙その精巧さに感服しずに居られません、これを昔の人の様に「自然天然である」など、澄し込んで居られないのです。どうかこの不思議を、不思議でなくしたいのです。我々が生れて来て、育つて、子を産んで、年を寄つて、死んでしまふ。これは、當り前の事なのですが、何の爲めに生れ、何の爲めに死ぬのだから、中々判らないのです。「世の中の一切は觀念の束である。觀念であるから運命があるのである」どうもこれ丈では、成る程さうかと引退る譯には行きません。どうしても「觀念とは何ぞや」を知らなければ、まるで飯を口に嘔んだまゝで呑み込まないやうなものになるのです。

席亭や劇場へ行きますと、我々はよく奇術や手品を見せられます、あの手品にはみんなそれぞれの種と仕掛と技倆があるもので、別に不思議なものではないのですが、見物人はそれを知りつゝ、然かもよく不知識がります、一本の紐を細かく切つ

てしまつて、それを手の内へ丸めると、その紐が元の通りに繋がつてしまつたり、眞赤に燃え立つ火の中から鳩でも飛び出したりすると、見物人はやんやと手をたいて喝采します。あれは奇術者が種を用ひて見物人の眼を誤間化してやるのです。見物人の方では自分が誤間化されて居るのを知らずに、不思議だ〜と言ひます。そして何んとなくその種を知りたがります。

人間でも、親に死なれたり、夫に死なれたり、最愛の子供を失つたりすると、此の世の中が怨しくなつて來ます。人間はどうして死ぬんだらう。といふ不思議な感念に満されます。世の中を夢の様に、謎の様に感じて來るのです。それと同時に信仰とか哲學とか、いふものを求めるやうになります。我々に覺醒の轉機を與へるのには世の無常であります。

哲學は其れ等の時、其不幸の人に取つて福音となるのです。哲學の研究を觀念のあたりで留めてしまふと、所謂厭世家になります。又觀念より以上の研究、即ち「觀念の實體とは何ぞや」といふ問題の研究を誤つた方法を以つてすると、不可解とい

ふ事になり勝なのであります。茲が哲學研究者に取つて尤も重要な點があらざるから其の研究的態度に就て、深甚の注意を拂はなくてはなりません。米國のロージヤース氏は「哲學史教科書」の結論に。

「今日に於ける哲學結極の問題は、科學と宗教、機械論と目的論、事實と理想との衝突を如何に解決すべきかと言ふことである云々」

と述べて居ります。實際、それに相違ないのです。それは兎に角、前章の觀念の處までは、大抵の哲學者の意見が大同小異です、即ち「宇宙は觀念也」といふ事に就ては、殆んど意見の相異はないのですが「此の觀念とはどんなものか」といふ根本論になると、哲學者の議論が幾つにも別れてしまつて、何れを眞、何れを偽とすべきやに迷はされてしまふのであります。

今其等の學者の説を大別しますと。

機械論

目的論

の二種になりまゝです。けれども其等の學説は、いづれも議論でありまゝです。觀念の項に於てくどくど述べた如く、我々の脳味噌といふものは、全部觀念の束なのであります。觀念の働きのいふものは、いづれも限局的で運命的で物質的のものなのであります。程度の知れた脳味噌なのです。此の程度の知れた脳味噌で、悠久なる天地の根本原理を考へてほんとうの事が判る道理は無いのです。人間の頭から割り出した、議論や研究などで此の眞理は闡明することは出来ないのです。何故とならば、宇宙の眞理は人間の考より以上のものだからです。大哲學者カントは、我々が持つて生れた、脳味噌や、智慧や、王風や、學問の力では此の根本の眞理は判らぬ。即ち觀念以上のもの（超經驗的）に依つて初めて吾人は眞理に悟入することが出来ると言つて、有名なる認識論といふ意見を發表されました。流石は大哲學者と後世にまで唄はる丈あつて、カントの見識には我々は敬意を表さなくてはなりません。ハルトマンは宇宙の根本は無意識の意志であると決論されました。氏は曰く、

「哲學の究竟原理は絶対に超越的なものである、我々の智識といふものの範圍は、

純然たる假説的のものである、故に人間の智識は如何に努力するとも、論理以上の神秘的なものをゆるさなければ、宇宙の究極原理は理解することが出来ぬ」又曰く「哲學は天才的、神秘的直観に基くもので、かゝる直観力によりて初めて吾々は經驗世界の根底に横はる無意識的精神活動に參することが出来る」と言つております。カントやハルトマンのいふごとく、宇宙の眞理は、不測の邊にあるものなのです。ですから議論を以て此の眞理を解明しやうとする、機械論や、目的論ではほんとうの事は判るものではないのです。

つまり見物人が、手品を不思議だ〜と見て居るやうなものです。これを座席から見るから判らないのですが、一朝奇術師の弟子となつて、此の種のやり方を教はれば直に不思議はなくなるのです、此の世の中を不思議と見るのは、世の中が不思議でなくて、不思議といふ人間の方が不思議なのです。ですから立場をヒヨットかへれば、此の世の中の事はなんでも、すつかり判るのです。それは何んであるかと言へば

◇宇宙の實相は我々の人格に依つて判る

といふことなのです。カントが「哲學は吾人に道德の必要を教ふ」と絶叫した如くハルトマンでも、シヨペンハウエルでも、ヘーゲルでも、最近のベルクソンでも、著名なる哲學者は皆一整合に、我々に人格の必要を力説して居ります。かくて倫理の必要は、哲學に依つて明確に立證されました。釋迦とか基督とか黒住左京とかいふ人々は、いづれも立派なる宇宙觀 人生觀 を持つて居られますが、其等の人々が又人格に於て一點批難すべき點のないことも、我々は深く考へねばなりません、つまり人格と眞理とは同一のものであります。著者は機械論と目的論の議論を述べることが本意ではありません。けれども議論を以て、宇宙の眞相を捉まへようとする、勢ひ此の機械論と目的論に入るより致方がないのです、讀者諸君の御參考として極く茲に簡略に述べることとします。

機械論

大勢の哲學者が、いろ〜に述べた、議論を大別して機械論と申すのですから、

此の機械論に編入される議論丈でも、實に無数の種類があるのです。又機械論とも目的論とも判別のつかぬ議論もあるのです。けれども、極く一口に申上れば、此の宇宙及人生といふものは、超人的の勢力に支配されて居るものであるから、假に神とななければならぬ、神は時間の制限を受けない生物であるから、勿論初りも終りも無い。空間に存在して居て時間の感念の無い神に、目的なぞといふ時間的の意識のある筈がない。目的といふものは、理想の顯現を意味する。理想の顯現には時間的の耕耘が居る。超時間的の神に、經驗を必要とする目的なぞの有る道理は無い。宇宙及人生は要するに是の如きものに過ぎぬ。宇宙及人生は、神が創造經營して居るので無くて、直に神そのものの表現である。我々人類初め一切のものが消滅を繰返して居るのは、丁度一日の中に黎明と日没があるが如く、目的なしにぐるぐる廻轉して居るに過ぎないものである。神は唯生きて居るといふ存在物に過ぎぬ、恰も機械が廻轉だけして居るやうなものだといふ事になつてしまふのであります。然うして一切の行爲問題でも何んでも彼でもみな此の理論で律してしまふのであり

ます。

目的論

目的論でも、宇宙の森羅萬象は神それ自身の顯現であるといひます。此點は機械論とも共通します。依つて神自身の顯現である以上、我々も又神自身の顯現と見做すのです。一切を汎神論的に見て來ます。故に神に目的は無いとしても、神の顯現である我々に目的があれば、それは直に神の目的といふことが出来るといふのであります。神は眞理であるから我々も眞理を行ひ、神は善であるから我々も善も行ひ、よく神そのものを顯現さすことが、人類に必要なことである。神に目的がないとしても、人類に行爲がある以上、其れを以て直に神の目的とすることが出来る。神の榮光といふものは、我々の行爲に於て、的確に證明することが出来る。故に宇宙には目的があるものであるといふ傾向の、議論になつて來るのであります。然し乍ら、目的論といひ、機械論といひ、到底我々の觀念以上の議論ではないのですから、其等の説に耽溺してはなりません。哲學に教師があると思つては飛んだ

間違ひです、宇宙の眞理は人々に教はつて判るものではありません、我自らが、神と同じ人格に到達した時、釋然と解明することが出来るのであります、修證義に、
 我れはこれ既成の佛、汝らが當來は佛祖ならん
 と説いてあります。これは深く味ふべき言葉であります、兎に角、學問や理屈に凝り固まつては、眞理といふものは判り兼ねるのです、「凝つては思案の外」とはこの事でありませぬ。

認識論 (其一)

寄せ物

可愛い、子には旅させろ

世の中に芝居を見ない人は一人もないでせう、そして芝居といふものは興業者と役者とが、商賣をして居るのだといふ事を知らない者もないでせう。其上狂言とい

ふものがみんな、作り事だといふ事も誰も承知して居ることなのです。
 それ丈の事が、はつきり解つて居る癖に見物人はよく泣かされたり、笑はされたりします。それ等の芝居を見て泣く人でも、必度新聞を讀んだのでは泣きませぬ、毎日の新聞には「貧故の自殺」だの「嫉妬の結果發狂」だのといふ記事が出ますけれども、それを讀んだのでは、如何も泣く氣になりませぬ、何故泣く氣になれないかと云ふと、新聞の記事で現はすと、どんな事件でもたゞの報告にしてしまふからなのです、「何處の娘が失戀の結果、河へ身を投げて自殺した」如何もこれだけ讀んだのでは「まあ可哀想だつた」位の事を一寸考へるだけで、片附けられてしまひます、もう少し深く考へる人になると「死ななくつても如何にかなりさうなものを馬鹿な奴だ」とか「此の廣い世間で男は一人だけぢやあるまいし」とか何とか自分勝手な、自分の身と同じだと思つて笑つてしまひます。處が死ぬ方の身になると、どうしても死ななければならぬ處まで來てしまつて居るのに相違なかつたのです。
 どんな馬鹿者だつて粹狂や面白半分で自殺が出来るものぢやありません、けれど